

次 目

皇紀二千六百年を迎えて	本	多	生
聖訓摘要	本	林	郎
開目鈔講話(第三十二講)	小	日	常
和歌勅題	本	一	見
立正安國論略講	和	日	英
肇國神話(完結)	岩	義	
八紘一字と四海同胞	河	直	
記事	合	野	

○本部團報 ○福島支部報  
○團費誌料寄附金及維持費領收

號月正年五十四第

統

一

法人團  
統  
一團發行

## 皇紀二千六百年を迎えて

悠久なる哉 二千六百年 萬世一系の 天皇を戴く、爰に事變第四の新春を迎え 一億の蒼生異軌同心 皇威益々顯揚し 今や大陸新秩序建設に嚮はんとするの時 四邊の情勢極めて複雑怪奇を覺え憂慮禁ずる能はず。内外多事、西歐の騒亂其東漸の豫測を許さず、太平洋の風浪冬季大なり。神州の丈夫一難來る毎に彌々歎を増す、更に驚怖なし、一乘の民たる所以歟 偏へに聖訓を憶ふの情切なり、

開けゆく時にいよ／＼仰がれぬ 聖りの御代の高き教は。

法は赫なり世間は影なり赫曲れば影斜なり。

今の時人心教化を層一層高調せざる可らず。然り而して當面の教化は世上多く之を知ると雖も、根本の化導に到りては轉た遠きの憾あり。上宮太子の云く「其れ三寶に歸せずんば何を以てか狂れるを直くせん」と。苟くも我が精神文化の精髓を體系的に光顯するは 是れ教家の本分にして須らく前線に勇躍すべきなり、遲退して悔を千歳に貼さざれ。

微力吾曹 既起つて萬障を排除し 恩師本多日生全集の刊行を劃策し 今當に其第一輯を剗刷に附せんとす 是れ法國に對する報恩の一步なり、是れ教界に於ける當然の責務なり、是れ二千六百年に處する記念の淨行に非らずや。

度みて 佛祖三寶の冥護を惴懼する者なり。

(滿 吏 敬 白)

## 聖訓摘要

本 多 日 生

### 松野殿女房御返事

濁れる水には月住まず、枯れたる木には鳥なし、心無き女人の身には佛住み給はず、法華經を持つ女人は澄める水の如し、釋迦佛の月宿らせ給ふ。譬へば女人の懐み始めたるには、吾身には覺えねども、月漸く重なり日も 屢過ぐれば、初めにはさかと疑ひ後には一定と思ふ。心ある女人は男子、女をも知るなり。法華經の法門も亦かくの如し、南無妙法蓮華經と心に信じぬれば、心を宿として釋迦佛懷まれ給ふ、始めは知らねども漸く月重なれば、心の佛、夢に見え悦こばしき心漸く出來し候べし、法門多しと雖も止め候。法華經は初めは信する様なれども、後迷る事かたし、譬へば水の風に動き、花の色の露に移るが如し、何として今までは持たせ給ふぞ、是れ偏へに前生の功力の上釋迦佛の護り給ふか、頼母したのもしし。(繪圖遺文錄 九九七九)

濁つた水には清い月は映らない、枯れた木には鳥も巢をくはない、心無き女の身には佛様はお住みな

二  
さらない、法華經を持つ女は澄める水の如くであつて、お釋迦様の月がお宿り下さる。譬へて見れば女が子供を懐妊するのに、始めは氣がつかぬやうだけれども、後にははつきり妊娠したことが判るやうなもので、法華經の信心も南無妙法蓮華經と唱へ始めた時には、何が信仰の目標やら意識が不透明であるけれども、段々信じて居るとその法華經南無妙法蓮華經の信仰の中には、釋迦牟尼佛がその精神に映つて來るのである。「南無妙法蓮華經と心に信じぬれば、心を宿として釋迦佛懷まれ給ふ」始めは知らないけれども、段々信心が進めば心の中に寫るお釋迦様の事が夢にも忘れられないやうになつて、寢るも起るも釋迦牟尼佛と共にありといふ信念になり、さうして如何に人生の悲みに遭ふ時でも、その釋迦牟尼佛の力に依つて慰さめられるのである、又法華經は信心の初めは容易しいやうだけれども、之れを遂げることが難い、花が咲いた時は美しいやうでも、雨や風に當つて色が褪るやうに、最初は熱心の信者のやうでも年月と共に色が褪せて、詰らぬ古ぼけた信者になつてしまふ。然るにあなたは年月を經るに隨つて益々色鮮やかに信心をなされた、あなたは洵に威心な方である、これはあなたが前の生から功德を積んで居つた力と、今現にお釋迦様に護つて貰つて居る力の二つに依つて、この正しい信心を續けて來られたものと思ふといふ事が書かれて居ります。

この中に二つの大事な教訓があると思ふ、一つは、お題目の信心といふものは萬有神祕のものではない、何でも有難いといふ意味合ではない、お題目の中には何でもあるといふ思想は、随分御妙判の中に澤山出て居るが、屢々申す通り「何でも」といふ事は甚だ混雜した思想である。「何でも有る」といふことになるを中心といふものが判らなくなる、それは佛様もあれば菩薩様もあり、諸天善神も御座るし、十界みな有るのであるから、地獄も餓鬼も畜生もある、蚯蚓もあれば蛙もある、何でも有る、けれども唯だ「何でも有る」といふ事が有難いと言つて居ると、何が何だか意味が判らなくなつてしまふ。そこでさういふお題目だけ唱へて居る人の信仰意識は、眞言の思想と同じになつて居る。眞言は何でも佛様おやというて居つた、それだから本尊の意味が少しも判らない、眞言宗の人は今日不動明王を信じたり、お大師様と言つて弘法大師を信じたりするやうな事になつて居る、丁度法華宗が鬼子母神を信じ、帝釋を信じ、お祖師様を信ずる事を知つて、この佛様を忘れ本尊を忘れたやうなものである、それで加持祈禱の熾んなること、迷信の蔓つて居ること、教を尊ばないこと、法華宗は今日一番教を尊ばない出鱈目であり、亂暴な信者の多いことに於て、眞言と全く趣きを同ふして居る。これは南無妙法蓮華經の意識がはつきりせぬからである、お題目を唱へて居れば段々その信仰の中にお釋迦様が懐妊せられるといふこの文章の如き意味になれば、洵に正しい信仰になるけれども、お題目を唱へて居れば鬼子母神様が懐妊するとか、帝釋様が懐妊する、其處等はまだ宜いけれども、終ひには柳島の妙見様ナンと言つて、白い蛇が懐妊する、いろ／＼なものが出て來る。それでさういふ風にお題目を萬有神教的に考へるの

三  
は、眞言ズリの思想になつて居るのである、御遺文にも澤山あるけれども、これを正意としてはいか

ぬ、壽量品の教意に基いて第一に本佛を意識し、さうして本佛と吾々の間の關係に於て、お題目は佛様から言へば救ひの綱である、吾々から言へば渴仰の手である、茲にお題目を通して本佛と握手するものである、それ故に南無妙法蓮華經と唱へれば釋迦牟尼佛懷ませ給ふ、信心の水澄めば釋迦佛の月宿るといふ關係を起すのである。この意味に於て『松野殿女房御書』は洵に宜しいと思ふ、殊に婦人の方などは、朝晩のお勤めなどにこの一節を暗誦するやうになつたならば、南無妙法蓮華經と唱ふれば釋迦佛の月宿らせ給ふといふことに於て、今の法華宗の一般のやうな、何だか判らぬ姦夫の子みたやうな、蛇が飛込んだり、蛙が飛込んだりするやうな、萬有神のお題目の過ちを免れることが出来るのである。いろ／＼大事な教義がありますけれども、日蓮主義の教學といふものは是れからやつて行かなければ駄目である、題目を唱ふる者は本佛が懷ませ給ふといふ信仰に達せんければ、廣宣流布は思ひも寄らぬことであると私は確信する。

### 上野殿後家尼御前御書

#### 妙一女御返事

この中にも別段引く所が無い。

### 四條金吾殿御返事

何事よりも文永八年の御勸氣の時、既に相模國龍の口にて頸切られんとせし時にも、殿は馬の口に付て足歩赤歩にて泣き悲み給ひ、事實にならば腹切らんとの氣色なりしをば、何時の世にか思ひ忘るべき。そのみならず佐渡の島に放たれ、北海の雪の下に埋もれ、北山の嶺の山嵐に命助かるべしとも覺えず、年來の同朋にも捨てられ、故郷へ歸らん事は大海の底のちびきの石の思ひして、さすがに凡夫なれば古郷の人人も戀しきに、在俗の官仕へ隙なき身に、此の經を信する事こそ希有なるに、山河を陵ぎ蒼海を経て遙に尋ね來り給ひし志、香城に骨を碎き雲嶺に身を投げし人人にも争てか劣り給ふべき。(繪扇遺文錄)

これは四條金吾をお褒めになつた御教訓であります、洵に私は有難いと思ふ。日蓮聖人が四條金吾に對して言はれるには、どうもあなたの事は忘れる事が出来ない、それは龍の口法難の時にも、裸足で草鞋も穿かず、足袋も穿かず、大急ぎで椽側から飛び下りてその儘駆けつけて來られた譯である、熊王童子を使として『日蓮は是れより龍の口に頸切られに罷るなり』といふ事をお知らせになつたから、四條金吾は驚いて、兄弟四人「ソラツ」といふので裸足の儘で飛び出した、その時の光景が如何にも能く現はれて居ります。さうして『泣き悲み給ひ』とあるから、モウ途中から四條金吾はホロ／＼涙を流して『日蓮聖人様は愈々頸を切られさつしやるのか』と言つて、立派な侍がオイ／＼泣いてお伴をしたものと見えます。さうして『事實にならば腹切らんとの景色』——愈々頸を切られるといふ事になれば、

自分もあ供をして殉死をするといふので、日蓮聖人の頸がボンと飛んだならば、四條金吾は腹を切つてあ供をしやうとした、その時の意氣込が日蓮聖人の眼に留つた譯である。それ程日蓮を思うて下さる事は、何時の世にも忘れることは出来ない。又その上に日蓮が法難に遭つて佐渡ヶ島に流され、雪の中に閉ぢ籠められて居る時、日蓮もいろ／＼と考へて、モウ故郷には再び還ることは出来ない「ちびさの石の思ひして」といふのは、千尋の深い海底にある石が波の上に浮び上ることがあつても、日蓮は活かして鎌倉には還さんぞと、當時北條の人達が言つて居つた、千尋の海底の石が浮ぶことがあらうとも、日蓮は活きて鎌倉へは歸れないのかナと思つた時、心細くもなつた譯である。その時に誰も他の者は訪ねて來なかつたけれども、四條金吾は、官仕への忙しい身にも拘らず、態々北海佐渡ヶ島まで訪れ、日蓮の安否を訪ねに來て呉れたその志は、思ひ起すだに辱けないと思ふ譯である。日蓮聖人が佐渡御流罪中に訪ねて行つた人は、男では四條金吾、女の方では乙御前の母、後に日妙上人といふ尊號を日蓮聖人から貰つた方でありますが、これは孰れも立派な人であります、その外には佐渡ヶ島まで訪れた人はない、男の方では四條金吾、女の方では日妙尼、これは如何にも法華信者の中の双絶であります。

刑部左衛門尉女房御返事

この中には親孝行の事に就いて非常に詳しく書かれて居ります。

父母の御恩は今初めて事あらたに申すべきには候はねども、母の御恩の事殊に心肝に染みて貴く覺え候。飛鳥の子を養ひ、地を走る獸の子にせめられ候事、目もあてられず魂も消えぬべく覺え候。其れにつきても母の御恩忘れがたし、胎内に九月の間の苦み、腹は鼓を張れるが如く、頸は針をさけたるが如し、氣は出るより外に入る事なく、色は枯れたる草の如し、臥ば腹もさけぬべし、坐すれば五體安からず。かくの如くして産も既に近づきて腰はやぶれて断れぬべく、眼はぬけて天に昇るかと思ゆ。かゝる敵を産み落しなば大地にも踏みつけ、腹をもさきて捨つべきぞかし、さはなくして我が苦を忍びて急ぎ抱き上げて血をねぶり、不淨をすゝぎて、胸にかきつけ懐きかゝへて三箇年が間懇懇に養ふ。母の乳を呑む事一百八十斛三升五合なり、此の乳の價は一合なりとも三千大千世界にかへぬべし。されば乳一升の價ひを檢へて候へば、米に當れば一萬一千八百五十三斛五升、稻には二萬一千七百束に餘り、布には三千三百七十段なり。何かに况や一百八十斛三升五合の價ひをや、佗人の物は錢の一文、米一合なりとも盗みぬれば牢の巢守と成り候ぞかし、而るを親は十人の子をば養へども、子は一人の母を養ふことなし。(繪圖遺文錄)

父母の恩の中に殊に母の恩の重い事を説かれて、飛ぶ鳥の子を養ひ、地を走る獸の子に責められるを見ては、魂も消えぬべく、眼も當てられずと仰せられた、雀が小さな小禽でありながら、子供を養ふが爲に米粒を啣へて來、猫や犬が何匹もの子供を養ふ爲に疥せ衰へて居る有様を見て、人間の母親が子を

八  
養ふに就いての慈愛に想ひ到る時、あんな小禽でさへも子供を可愛がつて居るのである、人間の母親が子を育てる時分の気分といふものは、如何にも尊いものである。それにしても懐妊の時から子供の時分の養育、その乳を呑んだ償ひといふものは錢金に積ることは出来ないけれども、假に考へて見れば、乳一升の値打は非常な尊いもので、之れを米に換へれば一萬三千八百斛の値打があると言はれた、これは實に面白い事である、米の價ひにすれば一萬三千八百斛の米を以つて母親の乳一升の値打であると言はれた。然るに母親は貧乏の中にも何とかして子供を養つて、十人も産んだ子供をそれ／＼眼鼻をつけて行くが、その十人の子供が寄つて老ひたる母一人を世話することが出来ない、「お母さんはお前の所に伴れて行つて世話をしろ」といふやうなことで、兄弟が喧嘩をすることを出来ぬ、親は十人の子を養へども、子は一人の親を養ふ能はずで、洵に親不孝の者が世の中には多い譯であるといふ事を示しになりました、この最後の一言いかにも痛い言葉であります。日蓮聖人は洵に孝心の方であつて、自分が母親に孝養を十分盡すことが出来なかつたから、親孝行の人の事は殊更に感激をなさつて、御遺文の中にその事を仰しやつて居ります、「自分は法華經弘通の爲とは言ひながら、母の膝下に居て孝養を盡すことが出来なかつたから、世間の親孝行の人を見ると、せめてはその人の徳を褒めて自分の不孝の罪を免がりたいと思ふ」といふ事を仰せられて居る譯であります。

### 上野殿母御前返事

一切經の心は愚癡の女人などの唯一時に心得べきやうは、例へば大塔を組み候には、先づ材木より外に足代と申して多くの小木を集め、一丈二丈計り結び上げ候也。かく結び上げて材木を以て大塔を組み上げ候れば、返つて足代を切り捨て大塔は候なり。足代と申すは一切經なり、大塔と申すは法華經なり。佛一切經を説き給ひし事は、法華經を説かせ給はんための足代なり。

(繪圖遺文録一九九五)

一切經はどんな關係かといふ事に就いては、愚かな人達は、足場と塔を造る關係に於て心得たら宜からう。塔を立てるには足場を組み立て、行かなければならない、一切經は足場のやうなもので、塔は法華經のやうなものである、法華經を説かんが爲に一切經の足場は出来て居るのである。塔が立つてしまつても足場を残して置く必要もなければ、塔を忘れて足場だけを大事がるといふことも無いから、そこで愚かな人が一切經と法華經との關係を知らうと思ふならば、他のお經は足場である、法華經は大塔であるといふ事を頭に描いて置けば、簡単に法華經の尊とさが判るといふ事を示しになつたのであります。

# 開目鈔講話

(第三十二講)

小林一郎

この間はいろ／＼なお經の言葉を引かれまして、そのお經の言葉が法華經の本文に比べればまだ深い所に入つて居ないといふことを論じて居られるのであります。併ながら法華經に比べれば深くないと申しまして、兎に角こゝに列べてあるのは皆所謂大乘の經典でありますから、吾々の心組として學ぶのには十分な價值があるものであります。たゞ日蓮上人が屢々斯ういふ議論をして居られるのは、今までも申上げたけれども、心の信仰の中心として定めるのには最も完全なものでなければならぬといふ立場から議論をされる。一たび法華經の信仰がしつか

り定まれば、その法華經の信仰を扶ける爲には、どの經典のどの言葉もそれ／＼役に立つて來るのでありますから、決して他のお經を捨て、これはつまらないものだとして排斥するには及ばないのであります。そこはどうか間違ひのないやうにしたいものだと思ふ。それはどれでも宜いといふやうな議論は出來ない、何しろ心の中心といふものは定めなければならぬ、あれを信じ、これを信ずるといふことは出來ませぬから、頼りになるものを一つちやんときめて置いて、さうしてその信仰を扶けるものとして、出來るだけいろ／＼な良い教を取入れるといふ

風にして行けば宜いと思ふのであります。さういふやうな意味で讀んで参りますと、こゝに擧げてあるいろ／＼なお經の言葉も、それ／＼に何等かの教訓にはなつて居るのであります。何れも大乘の經典である以上は、それ／＼の價值は有つて居る譯であります。今日はその續きであります。

大般若經に云、聽聞する所の世出世の法に隨つて、皆良く方便して般若甚深の理趣に會入し、諸の造作する所の世間の事業も亦般若を以て法性に會入し、一事として法性を出る者を見ず等云云。

これはマア一通り深い理窟が説いてあります「世出世の法」世といふのは世間の普通倫理道德、出世といふのは世間を離れた佛教の教、斯ういふ意味であります。その世間の倫理道德、親に子が仕へる時には子供は斯うしてやれとか、夫婦の道を守れとか、

兄弟の道を守れとかいふやうなことであります。その世間の教、それから出世即ち佛法の教、人間の迷ひをどうして除くとか、人間の生命はどういふ意義を有つて居るとか、永遠の生命といふのはどういふことだとかいふやうなことは、これは世間の倫理道德では言はないのである、佛教の方で特別言ふのであります。それが皆どれも「方便」する。方便するといふのは一歩々々と深い方に入つて行くといふ意味であります。この方便といふことは要するに眞實の教に向いて行くことです。だから方便といふのは決して悔るべきものでもなければ、卑しむべきものでもない、眞實のことを知る爲にだん／＼深入りして行く途中の教が皆方便であります。譬へば東京から京都へ行くとすれば、静岡を通るのも、名古屋を通るのも、米原を通るのも皆方便です。其處を通つて行くのでありますから、だから方便の教といふのは眞實の教に通ずるものだ。斯う思はなければ

いけない。若しそれが眞實の教と逆になるならば、これは方便ではない。京都へ行くのに、上野から汽車に乗つて、大宮へ行つたり前橋へ行つたりしたのでは京都へ行かれない、それは方便ではない。だから方便といふのは眞實の教と通じなければ方便にならない。若し眞實の教と逆になればそれは「虚妄」嘘であります、嘘と方便とは異ふ、世間の人は吞氣な事を言つて「嘘も方便だ」と言ふけれども、嘘と方便とは異ふ。嘘は幾ら行つても嘘で本當にならない、方便はモツと深入りして行けば行くほど結局眞實のことが解る。それでありますから、横濱を通つて静岡を通つて、名古屋を通つて京都へ行くのが方便であります、上野から東北へ行つて北海道の方へ行つたのでは京都へ行かれない、尤も地球は圓いから結局は行けるか知れぬけれども、マアそれは圓いかな話であります。さういふものは方便ではない、嘘になる、嘘と方便とはハッキリ観別けなければな

それを方便として、それよりモツと深入りして行けば、結局眞實の教といふものと聯絡するのであります。だから世の中の教といふものは捨てることは出来ない、どんなにして行つても佛の教に聯絡しないやうなものなら方便ではない、虚妄、嘘であります。それは捨てなければならぬ譯でせう。それだから苟くも佛教を學ぶ上に於ては何より警しむべきことは、煩惱を減すべき教を求めることです。佛は迷ひを捨てろといふことを主にして説いて居らつしやるから、若し迷ひを扶けるやうな教が興へられるならば、それは何と言はうと嘘であります、それは眞實の方と逆のものだから間違ひであります。動もすると煩惱を扶けるやうな教の方が流行るのであります。それは法華經々々と言ひながら、法華經には御利益がある、法華經を讀みさへすれば寢て居ても金が儲かる……斯う言ふのは嘘であります。さうなつては眞實の精神と違ふのであつ

らぬ。佛の教に嘘はない、如來は虚妄し給はず、佛様は嘘は仰しやらない、けれども方便は仰しやる、方便といふのは深い教に入る手續として浅い教を言はれる、それが方便です。佛は方便は言ふけれども嘘は言はない、斯ういふ事を始終言つて居られるのであります。だから世間の普通の倫理道德でもこれを方便としてモツと深入りすれば宜しい。例へば親に優しく仕へるといふことは善いことだから、親に優しく仕へることをモツと深入りすれば、たゞこの世だけ仕へたのではない、永遠の生命があるのだから、後の世まで仕へるやうにしたら宜い、斯うなつて来る。子供を可愛がるといふのは世間の道德だから、それを方便として、たゞ子供を可愛がつたのではない、子供を本當に教へて人間として意義あるやうに生きさせるやうにするのが、本當に可愛がる道だ。斯うなつて来るから、世間の普通の倫理道德でも、そこに止つてはいけませぬけれども、

て、經の名前は何と言つても、説き方がその精神と違ふなら嘘であります。そこは間違ひないやうにしなければいけない。それだから世間の倫理道德でも、或は佛教の教でも、それを皆方便として、だん／＼それを頼りとして、モツとだん／＼深入りして行くと、結局「般若甚深の理趣」般若といふのは智慧のことです、佛の智慧と通ずるところの深い智慧、即ち極く深い道理に入つて行く、會入する。さういふ風に考へなければいけない。だん／＼深入りして行かなければならぬ。「諸の造作するところの世間の事業」これは吾がやつて居るところの世の中の仕事であります、事業といふことは仕事、商賣をするとか製造業をやるとか、或は政治を執るのでも教育をやるのでも、何でも宜しい、人間の世の中の仕事といふものを、「般若を以て」その仕事に如何なる理由があるかといふことを明かにする。「般若を以て」といふのはこ



これは大事でありませう。一體商賈するのは何の爲だ、何の爲だか知らぬけれども、商人だから商賈するのはだといふのでは心細い。一體商賈するといふことは如何なる意味だ、これが人生にどれだけの關係を有つて居るか。それが人間の働きといふことにどれだけ價值を有つて居るか、斯ういふ一つ一つの事柄の理由を明かにする。それが般若であります。般若といふのは譯せば「空智」、空なる智慧といふことであります。空といふのは差別を超え、だから空智は差別に執はれない智慧であります。人間としてといふことになれば差別を超え、男でも女でも、人間としては同じに觀なければならぬ、子供でも大人でも人間としては同じに觀なければならぬ。だが世間の仕事といふものは差別なしには出來ない、差別がなければ世間の仕事は出來ない。商賈するのである差別がなければ出來ない、どれでも宜いからいゝ加減に持つて行らつしやいといふのでは商賈は出來

ない。役人だつて差別がなければ出來ない、長官と屬官とあつて、長官が命令して屬官が聽かなければならぬ。時々小使が大臣に命令して見ようと言つてもそんなことは行はれない。世間の事は差別がなければ出來ない。併ながら高い地位に居つても低い地位に居つても、大きい仕事をしても小さい仕事をしても、人間の進歩を促し、人間の幸福を増進する爲に役に立つといふことになれば、それは差別を超えて居るのであります。

そこを觀るのが所謂般若で、空智を以て觀る。これは兩方から觀なければならぬでせう。佛教の方の立場から言へば、人間のする事、皆所謂佛性、佛と同じやうな尊い心持の現れた結果ナンだから、世間的に言つてつまらない事だつて非常な價值があるし、又世間的に言つて善い事、尊ばれることは無論價值があるでせうが、何れにしても有ゆることに皆それのの意味があり、それの價值があるので

そこを觀るのが所謂般若で、空智を以て觀る。これは兩方から觀なければならぬでせう。佛教の方の立場から言へば、人間のする事、皆所謂佛性、佛と同じやうな尊い心持の現れた結果ナンだから、世間的に言つてつまらない事だつて非常な價值があるし、又世間的に言つて善い事、尊ばれることは無論價值があるでせうが、何れにしても有ゆることに皆それのの意味があり、それの價值があるので

あります。さういふやうに、能く考へて「法性に會入し」法相といふのは、この所では絶対の眞理といふ意味であります。人間の仕事をして絶対の眞理、本當の眞理といふものに一致させること。法相といふのは眞如といふのと同じでありまして、眞如と言つても、法相と言つても、佛性と言つても、結局同じことを言ふので、絶対の眞實の理、本當の道理であります。それでどんな仕事でもだん／＼深入りして行けば、本當の人間の道、又總てのもの眞實の理といふものに一致して來る。本當の道理に一致しないやうなことは壊れてしまひ、崩れてしまひ、自然自然に無くなつてしまふ。

自然に消えてしまふ。英吉利のカーライルといふ人がうまい事を言つて居ります。大きな建物を建てるのに、その中の一枚の煉瓦でも斜に積んだらば、その建物はやがて龜裂が入つて來ると言つたが、それはさうであります。今のやうに鐵筋コンクリートと異つて、昔は煉瓦を積む、非常な大きな建物だから一枚の煉瓦ぐらゐはいつでも宜いと思つて、斜に空隙を置いて積んだらば、どうなる、その建物全體が狂ふぢやありませんか。たゞホンの一つのもので狂つたら全體に狂ひが來るといふことを言つて居りますが、それはその通りであります。小さい事が大きな結果を生むのでありますから、小さい一つの煉瓦を完全に積むことが、大きな建物全體をチャンと狂はせない本である。斯ういふやうに考へて行けば、人間の小さい仕事に力を打込んで行けば、それが結局世の中全體の進歩に役に立つ、一つとして法性を出でざる者なし、眞實の絶対の理を現はすとい

さういふやうに絶対の理と一致するやうに考へて行くと、「一事として法性を出る者を見ず」人間の爲すべき事のどの仕事でも、何等かの道理を有つて居り、何等かの理由を有たないものは一つもない、若しその道理に合はないものがあれば廢れてしまふ。

さういふやうに絶対の理と一致するやうに考へて行くと、「一事として法性を出る者を見ず」人間の爲すべき事のどの仕事でも、何等かの道理を有つて居り、何等かの理由を有たないものは一つもない、若しその道理に合はないものがあれば廢れてしまふ。

ふことに役に立たないものは一つもありはしない。チヨットした小さい事を真ッ直ぐにするといふことが、非常に大きな結果を及ぼすではないかといふのであります。

さういふやうな所を能く捉まへて行けば所謂大般若といふことになる。般若經は空智を説いたものでありまして、凡そ世の中の有りと有ゆるもの一つとして存在の意義を有たないものはない、又人間のあらゆる働らきが、一つとして働きとしての價値を有たないものはない、斯ういふことを茲に説いて居るのであります。だからこれだけで見ますればこの教は立派な教であります。たゞ絶対の理はどんなものだとし、時に、それだけでは解らない、法華經に至れば、それは本佛といふ一つの活きた佛の力が現はれたものだ、モウ少し深入りして見ればさうなる。そこで法華經に比べればまた浅い、斯ういふ議論が立つのであります、併し法華經に比べれば淺

て大日如来といふ佛様が教を説いて居らつしやる。

その秘密主に對して仰しやるには、大乘の行といふものを最初はやらなければいけない、大乘の行といふのはどういふ行かといふと「無縁乗の心を發す」ことだ。これは



先づ姑く有縁と無縁とに分ける、さうして能く考へると有縁も無縁もやはり有縁だと言ふ。少し變なことを言ふやうであります、チヨット考へると人間を分けても、縁の有る人と縁の無い人とに分かれる。知つて居る人といふのは縁が有る人、知らない人といふのは縁が無い人。或は親子の間でも、自分の家の子供は親子の縁が有る、他所の家の子供とは親子の縁が無い。宗教でも斯ういふ同じ所に集つて居ると縁が有るが、往來を歩いて居る人は縁が無い。斯ういふ風に分ければ縁の有る人、縁の無い人といふ

いにしても、この教そのものだけを見れば、只今申したやうに、やはりこれは吾々の日常の仕事の上に大に役立つ教訓には違ひない。

大日經第一に云、秘密主、大乘行あり、無縁乗の心を發す、法に我性無し、何を以ての故に、彼往昔是の如く修行せし者の如きは、蘊の阿頼耶を觀察して、自性幻の如しと知る等云云。

これは大變難かしいやうなことであります、大日經といふお経は、大日如来といふ佛様の力が現れて、總てのものの存在となり、總てのものの理由となる。斯ういふことを主にして説いたものであります、それを言つて居る「秘密主」といふのは、大日如来が教をお説きになるその教を伺つて居る人のことであります。秘密主といふのは金剛薩埵といふものと同じことでもあります、その秘密主といふものに對し

やうに分けられるのであります。それで縁の有る人間には自分が骨折つてやる、縁の無い者には骨折らないで宜い。これは普通の考であります。自家の子供が洋服を拵へて呉れと言ふから金を出してやる、隣家の子供が洋服を拵へて呉れと言つても、隣りまで世話をやきはしないといふやうな譯でせう。自分の知つた人がお客に來ればお茶を出す、縁が有るか……往來の人を呼入れてお茶を出すには及ばぬ。斯ういふやうな譯だから、普通から言へば縁の有る者と縁の無い者といふ二つに分けることは無論である。併し同じ人間であれば、縁の無いやうに見えても結局何處かで縁が有る。縁の有る者と見える者も、縁の無い者に見える者もやはり縁が有る。だから縁の無い者をまるで捨てしまふといふことはしない。それが無縁乗というて、縁の無い者までも取入れて相手にするといふ心持、これが所謂佛の大慈悲であります。佛はさうであります。佛様はどんな人

間でも一切衆生を皆自分の子と見て、一切衆生を皆教へようとして仰しやつて居るのだから、縁の有る者も縁の無い者も、やはり皆縁の有る者として結局救はれるといふこれが無縁乗であります。

但しその順序はある、これは思ひ違ひをしてはいけない、縁の有る者も縁の無い者も救ふのだ。併しどつちから初めにやるかと言へば、縁の有る方から始めて縁の無い方に及ぼす。そこを間違へると又大變なことになる。それが動もするとそこを間違へる。一切の人間を救はなければならぬと言ふのだけれども、初めから一切の人間を救ふことは出来ないから、初めは自分に近い方からやつて、遠きに及ぼす。この順序といふものはこれは考へなければいけないのであります。自家の子供を放つて置いて、隣家の子供に宜くするのはいけない。自家の親父が腹を空らして居るのに、隣りの親父に牡丹餅をやつたりするのはいけない。隣りの者にまでやるのも宜い

「法に我性無し」法といふのは總てのものといふこと、我といふのは限るといふ意味で「我性無し」は限られた性質が無い。これは斯うだと限つてしまふ必要はない、有ゆるものは限りなく發展して行く、それが「法に我性無し」といふことであります。自分といふものもさうであります。自分といふものはこれで澤山だといふものではない。少しばかり佛敎を習つたからモウこれで澤山だ。法華經が一通り解つたからこれで澤山だ、さうきめてしまふべきものではない。まだ／＼知らなければならぬことは澤山ある、まだ／＼覺えなければならぬことが澤山ある、佛様と同じにならない間は、俺は斯うだと言つたつて俺といふものはきめられない。それが法に我性無しで、自分は斯うだときめられるものではない。私共は大分年を取つて居りますが、それでもさう思ふ。これで終ひぢやない——ヒョットしたら多分これで終ひぢやないか知らんとも思ひますが——

一八  
が、自家の親父にやつて餘つたら隣りにやるが宜いのであつて、自家の親父にやらぬで隣りの親父にやつたらそれは順が違ふ。だから有縁も無縁も皆縁が有るのだ。有縁より始めて無縁に及ぼすのです。これは忘はないやうにしななければいけない。

この事は非常に佛敎の修行に於ては大事なことであります。先づ自分の家をまッ直ぐにして隣りの家に及ぼす。自分の家の妻子を飢に泣かせて、俺は天下の政治をやるのだと言つてもそれは始まらない話であります。それは心持としては縁の無い者にまで及ぼさうといふことでなければならぬが、先づ縁の有る方から徐々に縁の無い方に向いて行くべきであります。それが平等と差別の關係であります。差別をまるでやめる譯には行かない。併ながら差別を超越して、縁の無いやうな者にまでも及ぼさうといふ心持がなければならぬ。それが無縁乗の心を發すといふことであります。

ナニニ本當は五十年や六十年ぐらゐることこれで終ひといふことはありはしない。これからモツと大に勉強して、モツと信心して善くならなければ仕様がなない。行止りといふものはありはしない、完全ぢやないから完全になるまでは行止りといふものはない。斯ういふ風に思ふのは、人間でも世の中の事でも一切の事さうであります。これで澤山だ、これでは止りだといふことはない。それが法に我性無しといふことで、限りなく發展し、限りなく進歩しなければならぬのであります。何故ならば現在には不完全なものだから、不完全なものの中で善い悪いをきめて、この方が善いというて安心してはならぬ、また他の善いものに比べれば善いものが幾らでもあるから、モツと善くならなければならぬ、モツと完全にならうといふやうに考へて行くのであります。一切の事柄がこれで澤山だ、これで止りといふものはない。それが法に我性無しといふことであります。斯

ういふお經の言葉を下手に讀むと、「法に我性無し」といふから何も無茶苦茶だ、どれでも宜いやといふ風になるけれども、決してさういふ意味ではなくて、これで止つてはいけない、モツと發展しなければならぬ。斯う思ふのであります。これは非常に大事なことでありませう。

それで「何を以ての故に、彼往昔是の如く修行せし者の如きは、蘊の阿頼耶を觀察して」蘊といふのは集つたもの、總ての集つたものの中に含まれて居るところの阿頼耶といふのは、眞實の性質のことであります。この阿頼耶といふことはいろ／＼異つた意味に使つて居るが、眞實の性質の意味にこゝでは使つて居る。總てのもの眞實の性質を考へて見ると、「自性幻の如し」今まで現れた事の如きはまだまだ本當ではない、こんな事はまだ本當ではない、斯う思ふ。例へば私なら私が、私といふもの本當の性質を考へて、私は智慧もなければ徳も

る。これからだ、斯う思ふ。さうすると今までの儲けは幻の如し、假の儲けだ、一時のものだ、大したものではない、斯う思ふ。人間といふものは限りなく發展しなければならぬものであります。世の中の仕事もその通りであります。これで澤山だと思つてはいけない「自性幻の如し」といふことは良い言葉であります。モウこれで澤山だと思つては行止りだ、まだ／＼モツと良くならなければならぬと思ふ。信仰のこともその通りであります、なか／＼私共は十年や二十年習つたからと言つても本當のことは解るものではない。自分の今までやつた事などは幻の如し、幻の如きものだ、少しばかりやつたぐらゐのものは大したものではない。これから一つしつかりやらうと思ふ。これが本當の大乘の行ひといふものであると思ふ。これは大乘の行といふことを能く説明して居るやうであります、實際大乘小乗の區別は、少しやつて直ぐモウこれで澤山だと思つ

なければ何もいけれども、私共でも佛様と通ずるところの尊い性質を有つて居るから、その尊い性質が有ると考へた時に、今までの自分などは、人間の中でも多寡の知れたものである。今まで自分達が少しばかり學問したり、物を習つたからと言つても、それは多寡の知れたものだ。こんなことで満足してはいけない。まだモツとこれから大に發展しなければならぬと思ふ。仕事でもその通りで、吾々が仕事をしたと致しましても皆完全な状態に見える。ナニニ今までやつたことは何でも無い、たわいなことだ、斯う思ふ。自ら満足しない。これで足れりと思ふ。これが「幻の如し」といふことであります。幻の如しといふのは意味が無いといふことではない、假のものだ、また／＼本當の所に行つて居ない、これが非常に大事なことでありませう。商賣をするのも、モウこのくらゐ儲けたら澤山だと言つてはいけない。ナニニこのくらゐの儲けは多寡が知れて居

たら小乗であります。まだ／＼足りない、モツとモツとやらうといふ所に、そこに本當の大乘の心持といふものがある。(次續)

勅題 迎年祈世

日 常 謹 詠

新玉の年を迎へて祈るかな

人類同善世界一家

戦ひのをさまらん日を天地の

神にぞ祈る年の始めに

# 立正安國論略講

和賀義見

二二

## 一、安國論著作の緣由

立正安國論は、日蓮聖人が駿州岩本いわもとの實相寺じつそうじに於て一切經を閲覽あそばされ、やがて鎌倉に歸られて此の論をお纏めになり、文應元年七月十六日に、時の執權北條時頼しつげん ほうじょう ときよりに對して、宿谷入道光則しゆくたに げいすけを以て進覽せしめられたものであります。

## イ、著作の近由

此の安國論御著作の近因を考へますに、正嘉元年の大地震、二年の大暴風、續く年の大凶作、大洪水、或は正元年中に於ける大疫病、大飢饉等々の天災地妖が頻々として起てはならない大事態を生じ、刹へ世の中を救ふべき當時の宗教は遙に釋尊の御本意に背き、道義觀に於て其の正しきものを逸して居つたのであります。此に於てか日蓮聖人は御幼少の連長と名乗らせられた頃虚空藏菩薩の前に、『日本第一の智者となし給へ』と、誓願を籠められて、赤誠血を吐かるるに至つたのであります。即ち佛法の正義を顯はして、國體の本義を明かにし、皇國を泰山の安きに置かなければならぬといふことが、安國論御著述の遠由であつたのであります。

## ハ、付文と玄意

隨て安國論を拜しまするに、古來付文と玄意といふことを申して居りますが付文といふのは、御文章に現はれた表面の意味合を取ることであり、玄意といふのは、その御文章を通して大聖人の御眞意に觸れることであります。付文の方面から見れば、災妖を攘ふことに最も重點を置かれ、憂憤、警告の大文字を連ねて居られます。しかし其の玄意を釋めれば、開目鈔や、觀心本尊鈔等に示されて居るが如

り、其の災禍のために庶民の苦み、國中の惱みは到底見るに忍びざるものがあつたのであります。故に國內の騷擾、蒙古襲來等の大難を豫言し、國の上下を戒めて以て此等の災妖を攘ふといふことが、近い緣由であるとせられて居るのであります。

## ロ、著作の遠由

而して其の遠由に遡れば、源平の争ひ以來我國の相といふものが凡ゆる方面に於て紊れて居つたのであります。殊に安徳天皇が西海に沈ませ給ひ、續いて承久三年、後鳥羽、土御門、順徳の三上皇が、北條追討の軍、利あらずして、遂に陪臣の爲に遠流の御身とならせられ、日本の國にあつては、雨の猛きを見て龍の大なるを知り、花の盛なるを見て池の深きを知る』斯かる大事態が生ずるといふことは、正に大聖人が出現して佛法の正義を顯はし、國體の本義を昇揚して、眞の日本文明が之を契機として現はれなければならぬといふ深き御信念があらせられ、自ら任じて起たれたるの意氣が拜されるのであります。

而して又文の上には、主として法然の選擇集を擧げて、之を邪とし、之を『一凶』として掲げられて居ります。しかし大聖人の御眞意は、單なる淨土一宗に止まるのではなくして、當時鎌倉幕府の下に迎合して、唯寺門の發展や名利に懷れて居つた所の個人解説の新興佛教、念佛・禪二宗に對する折伏であり、やがて彼の律國賊と言はれたる所の、小さな個人道德を説くに墮して大本を忘れて居る律宗を痛撃されたのであり、殊に、『眞言宗こそ此の國の大なる禍なり』と仰せられて念佛、禪等は之を小惡となし、眞言宗を以て大惡と仰せられて居ります。是は、『大智慧の者ならでは此の法門さとり難し』故に先づ最も廣く世に害毒を流して居る、わかり易い法然の念佛宗を擧げ來つて、而し

二二

て餘りに公場對決を通して、堂々と彼等の邪惡を糺し、折伏せられようといふ御眞意があらせられたのであります。而して安國論に於ては、只今申したやうに破邪の一面がありませんが、顯正すなはち建設的の方面のことは、深く細かには仰せられて居らないのであります。しかし其の中に法と國との關係を明にし、又「信仰の寸心を改めて實乗の一善に歸せよ」と、明に其の核心をお述べになつて居るのであります。其の正法とは如何に、而して法國の關係、更に實乗の一善とは何かといふ點に至りますれば、聖人の御二代の御著作、殊に佐渡に於ける開目鈔に於て著はされます所の法門が、やはり立正安國論の文底に沈んで居ると拜するのであります。

## 二、本書の主眼

### 實乗の一善——統一開頭

隨て安國論御著述の主眼は何れに在るかと申しますれば佛法と國體とに於て其の誤れるものを破邪し顯正して實乗

の一善即ち宗教、道德、哲學、思想等々、一切の事を融合統一せられた所の大明を茲に建設せられようといふ所に聖人の御本意があらせられたかに拜するのであります。

以上を序説として、これより進んで本書の内容に就て申上げたいと思ひます。

## 三、本書の内容

立正安國論の内容は、十節に亘る主客の問答に依つて組織せられて居ります。主人といふのは日蓮聖人御自身であり、冒頭に「旅客來り嘆いて曰く」といふ其の客とは、彼の三度笠を冠つて行脚政治を行つて民心を收攬し、これを稱して善政と言はれて居つた北條時頼を指すのであります。この客の間に對して聖人が答へられる問答體を以て第九節まで進みまして、第十節に至つて此の旅客が領解をして、邪を捨て、正に歸するといふ一段に終つて居るのであります。

### 1、災難の由來を明す

先づ安國論の冒頭に、

「旅客來り嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天變

地天飢饉疫癘遍く天下に滿ち、廣く地上に迷る。牛馬

巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に

超え、之を悲まざるの族敢て一人も無し。」

即ち先程申したやうな各種の天變地天が引續きまして、

實に見るに忍びざる有様である。餓字果々として横はり、甚しきに至つては、此の斃れた人の肉を夜間ひそかに食したといふやうなことが記録に見えて居るのであります。之に對して、

「然る間、或は利劍即是の文を專にして西土教主の名を

唱へ、或は衆病悉除の願を待んで東方如來の經を誦

し、或は病即消滅不老不死の詞を仰いで法華眞實の妙

文を崇め、或は七難即滅七福即生の句を信じて百座百

講の儀を調へ、或は秘密眞言の教に因つて五瓶の水を

灑ぎ、或は坐禪入定の儀を全うして空觀の月を澄まし

若くは七鬼神の號を書して千門に押し、若くは五大力

の形を圖して萬戸に懸け、若くは天神地祇を拜して四

角四塚の祭祀を企て、若くは萬民百姓を哀んで國主國

宰の徳政を行ふ。」

即ち北條氏に迎合する所の當時の宗教家が、或は淨土、

或は天台、或は眞言、或は禪、各々其の宗の祈りを誦め、

或は民間の俗信に基いて禁厭をし、或は天地の神を祭り、

或は國の政治の上に減税を行ふといふやうな經濟工作をし

たり、色々な手段を試みたのであります。

「然りと雖も唯肝膽を揮くのみにして彌飢疫に逼り。乞

客目に溢れ、死人眼に滿てり。屍を臥せて觀となし、

尸を並べて橋と作す。」

實にいろ／＼慘憺たる光景が展開せられて來たのであります。

「觀れば夫れ二難疊を合せ、五緯珠を連ね、三寶世に在

し、百王未だ窮らざるに、此の世早く衰へ、其の法何

ぞ廢れたる。是何なる禍に依り、是何なる誤に由る

や。」

天には日月星の三光が輝き、地上には三寶を祀り國家として百王未だ窮らず、(百王これは鎌倉時代に於て、八

幡大菩薩百王守護の誓といふ思想が最も盛んであつたのでありますが、それは決して百代を以て畢るといふことではない、數に寄せて永久なることを云ふのであります。然るに何故斯の如く此の世も衰へ、佛法も廢れたのであらうかこれが即ち客の憂ふる所であります。

これに對して主人、即ち日蓮聖人のお答は、

『獨り此の事を愁へて胸臆に憤懣す。』

自分は深く此の事を愁へて、已むに已まれざる志を懐いて居るのである。而して是等の災難は如何なる理由に因るかといへば

『世皆な正に背き、人悉く惡に歸す。故に善神國を捨てて相去り、聖人所を辭して還らず。是を以て魔來り鬼來り、災起り、難起る。』

即ち正しき教に背いて誤れる信仰に就き、宗教家も爲政者も共に此の誤に陥つたが故に、善神は國土擁護の威光を失ひ、賢聖の士は去つて還らずといふことになつて、遂に國を護るべき力の有る者がなくなつたのであるから、そこである／＼な禍難が頻發するのであると仰せられたのであ

ります。

此の事は今日の支那の有様を見ますれば、洵に能く聖人の仰せられる意味合を窺ひ奉ることが出来るのであります。彼のソ聯の共產主義、また英吉利の功利主義の傀儡となつて正しき聖賢の教を捨て去り、眞に四億の民衆に對して幸福を興へようといふ事を忘れて、唯軍閥が自己の勢力を維持しようといふ事、利へ我が日本國の誠意を誤つて、徒らなる排日侮日の態度に出でましたことは、全く正に背ける姿であります。かるが故に今や心ある人々は皆蔣政權の下を去つて、日本の正義と手を握つて新なる東亞を建設しようといふ汪兆銘の運動、北支、中支に於ける要人の動きに心を寄せて居るのであります。必ずや遠からず共產黨竝に蔣政權は分裂紛糾を來して、支那の天地に新しき平和の光が輝くに至るであります。

## 2、災難の經證を擧ぐ

そこで客は、それは一體どういふ經典に根據があるかといふ問を出して、それに答へられて、諸經の文は繁多にし

て其の數甚だ多いが今其の中の若干を擧げて示さうといふので、金光明經、仁王經、大集經、藥師經等の明文

を擧げられたのであります。これは安國論の本文に就て御覽になれば明かでありませうけれども、有名なる七難三災の名前だけを茲に申上げて置きたいと思ひます。即ち

- 一、人衆疾疫の難
- 二、日月薄蝕の難
- 三、星宿變化の難
- 四、非時風雨の難
- 五、過時不雨の難
- 六、自界無道の難
- 七、他國侵逼の難

これが藥師經の七難であります。三災とは

- 一、穀飢
- 二、兵革
- 三、疫疠

と大集經に擧げられて居ります。是等の四經の文の鏡に照して如來の正法を捨て、邪法に歸する時には、正しく斯の

如き災難が至るといふことを、明かにせられたのであります。

## 3、破法破國の因縁

更に第三段に於て、仁王經等の文を引いて、法師即ち宗教家は、國王大臣即ち爲政者に向つて、破佛法破國の因縁を説く、則ち佛法の精神を殺し、國を誤るやうな事を勧めるのである。爲政者はこれを信じて邪なる法制を作つて佛戒に依らず、佛教の正しき精神を破る、これが破法破國の因縁であるといつて、更に日蓮聖人は、

『法師は謠曲にして人倫に迷惑し、王臣に不覺にして邪正を辨ずること無し。』

と斷ぜられたのであります。洵に當時の世の中の有様を穿つて居るのであります。宗教家が宗教の正しい道理に迷ふばかりでなく、國體の大義名分を棄り、人倫を墮つて居る。苟も世を教ふべき宗教家たるものが、三上皇遠流といふやうな前代未聞の大下剋上、歴史上未だ曾てあらざる大不祥事を見て、何をして居つたのでありませうか。彼の法然

上人の如きは黒谷の眞如堂に引込んで、念佛三昧に耽つて居つた。或る者は時の支配階級ともいふべき武家に取入つて、莊麗なる殿堂を建て、貴ひ、唯々諸々として北條氏の命の下に働いて居る。京都に在つては舊佛教といふものが徒らなる觀念の遊戯に耽り或は形式に流れ、遂に現實の世より遊離し、甚しきに至つては亂れの極致、小を以て大を討ち、權を以て實を破するに至つた。その誤れる宗教の内容と實踐とが、あの時代の禍の因を成したのであります。これは正しく宗教家に對する大鐵槌でありました。龍辯を以て宗教の邪正をごまかさうとして居る者に對して、眞向から、お前は人倫に迷惑して居るではないか、大義名分を誤つて居るではないかと大反省をうながされました。

又當時の政治家に對しては、政治論を以て攻撃されるかと思ふとさうではなくして、『王臣は不覺にして邪正を辯ずることなし』苟も王臣として輔弼の任に立ち、爲政者の立場に立つ者が、一國の消長に關係するところの思想信念の問題に就て全く盲目ではないか。國民思想の擔ふべき所を明にせずして、國家の興隆を致すことが出来るか、臣節

を全うすることが出来るかと喝破せられた。此の大警告は、洵に當時の爲政者に對する警告であるばかりではなく儼として萬世を照す大教訓であります。

#### 4、法然の破法

そこで其の破法、破國の因縁の種を播いた者は誰であるかといふ間に依つて、

『後鳥羽院の御宇に法然といふもの有り……週く十方の衆生を迷はす。』

それは即ち法然であると仰せられて、進んで法然の著述であるところの選擇集を引き來るのであります。

#### 5、選擇集の非、和漢の例證を擧げ、拾凶歸善、塞源截根を論ず

この選擇集に、道綽とか曇鸞とか善導とかいふ人々の誤つた釋を引いて、法然が捨閉闍地といふ文を載せ、遂に破法破國の大凶事を作るのであります。即ち選擇集に於ては、道綽は一代佛教を聖道門と淨土門の二つに分け、

曇鸞は雜行道と易行道との二つに分類し、善道は雜行と正行との二つに別つて、淨土の三部經を除いた以外の一代聖教を悉く聖道門といつて之を斥けるのであります。南無阿彌陀佛の一行は易行道である、最も易しい修行である、それ以外の聖道門の教へることは難行道である。彌陀の本意に叶ふことはたゞ念佛を申す事だけである、これが正行である、それ以外のものは悉く雜行である。讀誦雜行、禮拜雜行といつて、他の一切の經典を讀んだり他の佛菩薩をおがんだりする事はそれは雜行になる、我神明でも拜んではならぬ。斯ういふので、淨土の三部經を除いては、一切の聖教悉く『千中無一、未有一人得者』である、千人の中に一人も佛に成る者は無い、未だ一人も成佛した者は無いと言つて居る。甚しきに至つては、念佛の修行をして居ると後ろから群賊が喚び回す、『群賊とは聖道門を指すなり』と言つて、釋尊乃至十方三世の佛菩薩、悉く擧げて之を群賊であるとなすのであります。

斯かる文を以て一代聖教を捨閉闍地したのであります。聖人は此の文をお引きになつて、お前達は、法然は智慧

は日月に齊しく、徳は先師に越えた名僧知識と思つて居るであらうけれども、此の文を見よと言はれるのであります。即ち法然は斯かる邪説を掲げて、廣大なる佛教を局部的のものとして居る、釋尊の教は包容統一の明教であるのに、之を偏狭なるものとしてしまつた。即ち小を以て大を伐つのであります。殊に人々に對して、最も手近な、容易に出来る事といふ好餌を與へて、國民を指導すべき最も高く尊い大理想といふものを擲たしめた。現實を輕視するのみならず理想まで失はしめたのである、即ち低き教を以て高き教を捨てたのであります。殊に中心を誤つて、最も獨斷的なる小さな宗教と化し去つた、即ち三世の諸佛の在します中から、自分の好きな彌陀を一人選び出して、その佛に對する歸依だけで主師親三徳有縁の教主釋尊其の他の一切を擲つといふのであります。これは抑々佛教を誠に組織的に、幽遠廣大、而も統一的なる明教として説かれた釋尊の御本意を匿すのみならず、人々に向つては、所謂人間としての自覚を擲たしめたのであります。人生に對する勵みと申しますか、價値を創造すると申しますか、眞の人生の



意義を寓たしめたのであります。のみならず我が神國日本の  
の翳すところの肇國の大理想、天業恢弘、八柱一字の大使  
命、大和民族の有するところの氣魄、これ等を悉く拋棄せ  
しめたのであります。かるが故に聖人は

『如かず彼の眞新を修せんより、此の一凶を禁ぜん  
には。』

前申すやうないろ／＼の祈禱をしたり、迷信をやつたり、  
或は徳政を行つたりするといふやうな片々たる事をやるよ  
りも、此の根本惡を禁じなければならぬと仰せられたので  
あります。

之に就て、邪教の弘まることに依つて災難の起るといふ  
和漢の事例を擧げられて、彼の司馬氏の滅びる時には、  
『蓬頭散帶、奴苟して相辱かしむる者を自然に達すといひ』  
髮を伸ばし帯を締めないで居る、世の中を指導する者がさ  
ういふやうな亂れたる姿を爲し、而も公卿の子弟が皆之に  
倣つて『擲節鼓持する者と呼んで田舎と爲す』禮儀作法を  
正しく行うて居る人々を以て田舎者と蔑むやうになる。斯  
くなつたことが司馬氏の滅びる相であつた。その他二三の

見て心物の哀情を起さざらんや。』

切々として佛法の亂れを歎きたまふ御心情、而して如來の  
明教、殊に諸經の王たる法華經の教に依つて、此の佛法の  
亂れを正し、國體の正義を顯はさなければならぬとして、  
毅然として自ら任じて起たれる此の意氣こそ、當に今日の  
非常時に於ける我が日蓮門下の任ずる態度でなければなら  
ぬと思ふのであります。宗教家が唯だ一通りの形式的な托  
鉢をやつたり、或は寺門の經營に没頭したり、乃至は徒に  
遊戯雜談して明し暮さんが如きは、斷じて佛教徒の態度で  
はない。眞に日本人の血潮が漲つて居るならば、眞に佛陀  
の聖戒に副ひ奉らんとする道念だに滅せざるならば、何故  
奮起一番しないのであるか。聖人の此の御態度は、開目鈔に  
於ては『我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん  
我れ日本の大船とならん等と誓ひし願、破るべからず』と仰  
せられて、我が日本の有つところの大なる使命を明かにし  
なければならぬ、それが爲には指導精神であるところの佛  
法の亂れを正しくせんければならぬ。偏に佛陀の聖戒に従  
つて、佛法の衰微歎くところの心情、國を念ふ愛國の赤誠

事例をお引きになつて、我國に於ても現に後鳥羽院の御宇  
に彼の承久の大亂が起つたではないか、是れ法然等の邪教  
に因るのであると論斷せられたのであります。

## 6、法然詰責の上奏文

斯く論を進められましたけれども、客は尙ほ疑が霽れな  
い。それならば恐らく勸諭を下してさういふものは禁壓せ  
られなければならぬではないか、あなただけが勝手にさう  
いふ事を言はれるのではないかといふ疑を持つた。これに  
對して、法然の邪惡を延曆寺、興福寺等から奏聞をして、  
元仁年中に勅宣を下されて、法然の墓は發かれ、其の骨  
は賀茂川に捨てられ、選擇集の印板は悉く之を碎いて焚か  
れてしまつた。又その弟子達は流罪に處せられた、斯うい  
ふ事實があるのである。決して自分が勝手に言ふのではな  
い。

『子少量たりと雖も、恭くも大乘を學ぶ。蒼颯颯尾に附  
して萬里を渡り、碧羅松頭に懸りて千尋を延ぶ、弟子  
一佛の子と生れて諸經の王に事ふ、何ぞ佛法の衰微を

をお述べになつたのであります。

## 7、災妖を攘ふの法を明す(法國冥合)

そこで客は、未だ十分に領解が進んだものではありませ  
けれども、聊か心を釋し來りまして、お話の趣を承ると御  
尤であります。

『夫れ國は法に依つて昌へ、法は人に因つて貴し。國亡  
び人滅せば、佛を誰か崇むべき、法をば誰か信すべき  
や。先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし。』

成る程正しき宗教に依つて國は榮える、正しき宗教と國と  
は離るべからざるものである。而もその正しき宗教といふ  
ものは、これを弘める所の人に俟たなければならぬ、人に  
依つて其の法の貴いことが顯はれるのである。國と法と人  
との關係は不可分のものである。國と法、即ち佛法と國家、  
佛の教と經綸の道、この二つのものは、佛道は——成佛の  
教であります、現當二世を貫くところの明教であります。  
國家は天照大神を皇祖と仰ぎ奉る神皇正統一貫の國體の本  
義に基いて、正しい政道が行はれなければならぬものであ

ります。この經綸の道と佛道とは、各々その範疇を明確に致しつゝ、決して相離れるものではない。即ち日蓮聖人のお言葉にあるが如く『王法佛法に冥し佛法王法に合し』一如冥合して、國家は佛法の興隆に力を添へ、佛法は國家經綸の大業に翼賛するものでなければならぬのであります。而もこの考へ方は、佛敎に於ては二にして二ならず、二ならずして二なりといふ、この思想は決して二元的思想ではない、異つたる立場に在るやうであるけれども、表となり裏となり、即ち王法を表としたときには、主伴の關係となつて佛法は經綸をたすけ、信仰の範疇に在つては能所の關係となつて佛道は國民を正しき敎に依つて指導するものであります。この關係は仁王經には「二諦は常に即せず解心に無二を見る」と説かれてあります。亦もう一つの考へ方に依れば、體同用異といふ見方もあるかと思ひます。體を同じうして用きに於て二にわかれる、所謂十界互具なるが故に體は同じである、而も經綸の道は經綸の道、佛道は佛道としての用きを現はして居るものである。更に言へば、三世常住十方普遍の實在を、佛道の範疇に於て久遠實成の本

影を潜めてしまふのであります。印度が今日の如く民族の理想が低下して、白色人種の桎梏の下に苦しんで居る、而も佛敎の發祥地でありながら、今日佛敎が微々たる姿になつて居るといふのは、みな國の亡びた結果であります。そこでどうしても國の災を攘はなければならぬといふので、旅客の曰く『災を消し難を止むるの術あらば聞かんと欲す』これに對して聖人は災妖を攘ふの方法として、『謗法の人を禁じ、正道の侶を重んぜば、國中安穩に天下泰平ならん』正しき宗敎の本義を守る者を授けて、佛法の正義を破る者を戒めなければならぬといふことを、諸經の文を引いて諄々としてお述べに於てあります。殊に涅槃經の文を引かれて、憍豫國王が正しき宗敎家を擁護して、惡宗敎家、惡思想家、惡民衆を戒めて、謗法の輩の首を斬つたといふ事例、また有徳王が覺德比丘といふ正しき法師を擁護せられて、その爲に命までも要はれた、併ながら正法を擁護する因縁を以て金剛不壞の佛身を成就するこ

とが出来たといふ事例を引かれて、飽まで正法を擁護して謗法の者を戒めなければならぬ、所謂護惜建立を勧められ

佛と仰ぎ奉り、經綸の道の上に示現し給ふところを神明と仰ぎ奉るのである。而も斯く分れたやうであるけれども、これ亦冥合して、理想の文化を建設し、我が鞏國の大理想を實現し、往いては世界人類をして此の惠澤を共にせしむるものであるといふ、この法國冥合の大精神こそ、日蓮聖人畢生の御叫びであり、萬古に輝く明敎であるのであります。これは旅客の言葉とはなつて居りますけれども、それは論を進める段階としてさうなつたのでありまして、やはり日蓮聖人の抱負信念を吐露せられたるものであることに疑問はないのであります。

斯の如く法と國と人とは離るべからざるものである。

『國亡び人滅せば、佛を誰か崇むべき、法をば誰か信すべきや』全く國が亡びたならばどうなるでありませうか、彼の露西亞の革命は何を白系露人に興へたでありませうか、宗敎は悉く破壊されるに至つたのであります。斯く國が亡びるといふこと、革命が續くといふこと、異民族の爲に征服せられるといふ事を繰返しますときに、その民族の有つて居るところの高き理想を喪ひ、現實は墮落し貴き明敎は

るのであります。

#### 8、謗法退治の方法を示す

進んで次の段に於て、然らば正法を擁護して謗法を戒めるには、どうしても惡宗敎家の首を斬らなければなりません。苟も憎と名のついて居る者を、首を斬るといふことは、佛の敎の上から言つて如何であらうかといふ疑を出して、これに對して謗法の施を禁ずるといふことを明にされるのであります。釋尊以前にあつてはこれ等の者の首を斬つた。しかし釋尊以後の佛法に在つては『其の施を止む』謗法の者に對する施しを止めて、正しき者にこれを施すやうにすれば宜しいのであるといふことを述べられました。

#### 9、總じて謗法退治を促し改心歸善

を勸む

更に其の意味を強調せられて、今當座はわかつたやうな顔をして居つても、やがては忘れるであらう。さうして

正法を擁護して邪法を禁ずるといふことを疎かにして、破  
佛法破國の因縁をなすときには、

『早く有爲の地を辭して、必ず無間の獄に墮せん』

これは北條時頼に對して、あなたが正法を重んじて謗法  
を禁ずる事を爲さなかつたならば、如何に善政を施して庶  
民の心を牧養すると雖も、あなたは必ず短命であつて、死  
んでは無間地獄に墮ちなければなりませんぞと警告をされ  
たのであります。これは後年彼の諸宗の輩が、北條一門の  
尼御前等を讒かして讒言をした中に、日蓮は時頼殿が地獄  
に墮ちるといふことを申して誹謗して居るといふことを訴  
へた、それに就て日蓮聖人が文永八年鎌倉幕府に出頭して  
平左衛門から難詰せられた時に、それは日蓮が今初めて申  
すことではない、最明寺入道殿御存生の時から申したこと  
であると答へられた、實に痛快極まる回答でありますが、  
それは立正安國論の此の文を指されるのであります。

さうして進んで言はれるには、

『汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乗の一善に歸せよ』

片々たる局部的の信仰を捨て、遂に實乗の一善に歸せ

よ。宗教、道德、哲學、乃至一切の事を綜合して茲に統一  
の大明を興へる佛教の本義、法華經こそ實乗の一善であ  
ります。而して日蓮聖人がその教を要約せられた三大秘法  
發迹顯本の大事が其要義であります。佛教が分裂的にある  
のではなくして、實に一代の佛教といふものは整然たる秩  
序の下に統一せられなければならぬ。宗教のみならず道  
徳、往いては高遠なる哲學、それらのものが渾然と融和せ  
られた大教、それは國家の政道の上に、經濟の上に、教育  
の上に、産業の上に、あらゆる指導の根本精神となる、即  
ち統一開顯の大教、これが實乗の一善である。

されば統一とは中心に秩序整然たる全體の綜合統一であ  
り、開顯とは其各々が其の位其の所に立つて全能力最大價  
値を顯發するの謂ひであります。而も統一と開顯とは相離  
れるものではなく開顯の所に統一あり、統一に即して開顯  
があるのであります。これ一事實の上の用きの二方面であ  
ります。

『然れば則ち三界はみな佛國なり、佛國其れ衰へんや、  
十方は悉く實土なり、實土何ぞ壞れんや。國に衰微無

く、土に破壊無くんば、身は是れ安全にして、心は是  
れ禪定ならん』

この御教は、實に聖人の安國論に於ける顯正部門の中核  
を述べさせ給うたものとも拜し得るのであります。實に聖  
人一代の御叫びとしてのみ拜すべきではなくして、今日の  
時代並に永劫を貫くところの大明教なのであります。日本  
の國は正にこの實乗の一善、法華經の明教と、御國體の本  
義とが一如し、さうして東洋文化の精髓を採つて融合し泰  
西の文化は此を正しく批判取捨し以ていよいよ新なるも  
のとし、前代未聞の今日の難局を解決して、これが東亞の  
指針となるばかりでなく、進んでは世界人類に向つて、眞  
の文明とは斯の如きものであるといふことを示さなければ  
ならぬと思ふのであります。誤れる二元論、誤れる獨斷的  
な宗教、我の文明、懷疑思想、個人主義、功利主義さうい  
ふものから根ざすところの優越感、征服思想、侵略主義、  
搾取主義といふやうなものが、今や全世界を禍し、恐怖時  
代を現出して居るのであります。彼等に向つて東洋文明の  
精髓を知らしめ、我が肇國の大精神に則り、我が國體の本

義に基いて、畏れながら上 天皇陛下を仰ぎ奉り、億兆心  
を一にして眞實の誠を捧げ、堂々として彼等に向つて眞の  
日本の正義を知らしむる、そこには日蓮聖人の教が負ふと  
ころの任務や、實に絶大なるものがあるのであります。國  
民として我國の興隆を祈り、天壤無窮の皇謨を眞實し奉  
る、是れ固よりであります。又今日の時局に方つて興亞の  
大業に賛する此の聖業に力を致す、此れ固よりであります。  
併しながら、人類の全ての者に精神文明の正しきものを興  
へ、一面に於ては國家の力を以て邪を破る降魔の兵を進め  
る、是れ決して相離れたるものではないのであります。國  
と教とが全く一つになり、日蓮聖人の教に依つて國家非常  
の時に愈々充實を齎すことが出来る。而して國家の隆昌發  
展と共に法は更に廣く流布せられるのである。正に今日の  
世界は、前代未聞の大變事が起らんとする情勢に置かれて  
居るのであります。此の秋こそ、聖人が出現せられて建立  
せられたるところの一闡浮提第一の本尊を頭に戴き、日本  
國民一人も應ずる心なく法國の爲に不惜身命の奉行をしな  
ければならぬ時であると確く信するのであります。

## 10、歸正誠誤を領解す

さて最後の段に至つては、客が漸く領解をして、邪を捨て、正に歸する旨を述べるのであります。即ち

『先づ生前を安んじて更に没後を扶けん、唯だ我が信ずるのみならず、又他の誤を誠しめんのみ』

現當二世の祈を成就する、それは唯だ自分の爲にするのみではない。力ある者、事を行ふ實力ある人が先づ覺醒をして、多数の者を率ひなければならぬのであります。苟も國政の樞機に參する者、重要部門の擔當に任ずる者、國民精神に及ぼす影響の大なる立場に在る者、斯かる人々が嘗に我が信ずるのみならず、又他の誤を誠しめて、正法に歸して、正しき明教に依つて眞に國家の大理想を達成致し、ますやうに、私を捨て、敬虔眞摯なる態度を以て當らなければならぬと信ずるのであります。併せて又國民一人一人も正しき教に歸依して、不動の信念を堅持して義勇奉公の誠を捧げ、以て此の重大時局に生れ合せたる日本人として最も榮光ある使命の實現に向つて精進致したいと思ふの

であります。

## 附言

本講は私が失明して居りますので、御遺文を拜して講述することも能はず、原稿を複製して之を見ながらお話し上げることも出来ませんのと、僅々一時間廿分餘の時間で大略を申し上げたのでありますから、粗略の點の多かつたことと思ひます。此に大方の御諒察を希ふ次第であります。



## 肇國神話 (完結)

海軍少將

岩野直英

日蓮上人は、佛法を弘めるに就いて、佛法は非常に複雑な至れり盡せりの教であるから、これを弘めるにはその國の文化の程度をよく考へて、低い所には低い教を以てしなければ教化は困難であると仰しやつて居る。また法華經のやうな最第一の教は、一番いゝ國でなければ受付けないと仰しやられ、而して法華經のやうな教を世界に弘めるのには、その善い國に依つて弘めなければ弘まらぬ。日本こそ本當に法華經を受付け、法華經を世界に弘めるのに最も適した國だといふことをよく見抜いて居られる。そこが非常に有難いのです。日本がいゝ國だといふことは、どういふ所がいゝのかといふことをハッキリ見極めなければならぬと思ひます。

日本の國が立派になつたことは、歴史を重ねてだん／＼經驗を積み、また外來の教などを取入れて自ら育つて参つたのであります。その本性が立派といふことが、日本に獨特の長所であります。それは何處に見るかといふと、所謂肇國神話であります。勿論神話でありますから、不思議もありませんけれども、その思想の通り歴代の天皇が進まれて、神話がたゞの神話でなく、事實であるといふことに立證された。それが非常に尊いのであります。古事記などに書いてある話が、事實となつて現はれて来たといふことは實に驚くべき事でありました。日蓮上人も此所を御覽になつて居ると思ひます。諸君は法華經の事はよく知つて居りませうが、神話の中から私が指摘する所は極く簡單なことですけれども、それだけが日本國有の特長であります。今それを説明致しますが、豫て法華經を研究して居られる皆

さんが成程日本は、法華經を弘めるのに最も適した國であるといふことを御諒解下されば、私は感謝します。

この前お話し上げた時、出雲の國に於て大國主神が、天神の御子に深く國を譲つて、幽界から皇室をお護りしやうと誓約したところまで申しましたが、それを肇國の準備と申しました。天照大神は皇位は直系御子孫へといふ御建前で、出雲政權を説得した結果出雲方は快く政權を奉上致し、皇孫を奉護することを誓つた。出雲のやうな強い政權が降伏したから、地方小政權は固より 日の神の御子に背く事は到底出来ない、即ち神聖にして侵すべからずといふことが解つた。これまではまだ日本帝國といふものは成立して居らないが、葦原の中國に日本國を打建てやうといふ肇國の準備は最早出来た譯であります。そこでこれから天照大神は天孫に國を授け、皇統を定め、道統を垂れ給うたのであります。それから、天孫がこの豊葦原瑞穗國に降臨せられて、此處を世界の模範國として治められる事になるのであります。それから、さうなつた時に日本の國は始めて成立した譯であります。所謂肇國であります。

それでは肇國といふのは一體どういふ意味かといふと、國に主權が定つたことを簡單に肇國といふ、例へば神武天皇には神武建國があつた。明治天皇には明治維新があつた。さういふやうに建國といひ維新といふのは、國がだんだん發達して行く段階に當るのであります。肇國といふのは主權が定まることで、主權さへ定まれば肇國であります。その日本の肇國にどんな立派な精神があつたかといふことが見るべき所であります。それは天孫降臨の時の儀式をお話すればよく解るので、古事記の中でも一番大事な所で、皇室の起源を知る爲にどうしても吾々の覚えて居なければならぬところでありますから、讀みながら説明して行きます。

建御雷神が出雲降伏してから、天に上つて来て、葦原中國を平定した事を復奏した。そこで天孫降臨、肇國の段になります。古事記左の通り

兩、天照大神高木神の命以て、太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に詔り給はく、「今葦原中國平け訖へぬと白す。

故、言依し給へりし隨に降りまして知しめせ」と。

兩、其の太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の白し給はく、「僕は終に降りなむと裝束せし間に、子生來ましつ。天邊岐志國邊岐志天津日高日子香能邇邇藝命と名く。此御子を降す應し」と。

是を以て白し給ふ隨に日子香能邇邇藝命に詔科せて、「此豊葦原水穗國は汝知さむ國なりと言依し賜ふ。故、命の隨に天降りますべし」と詔り給ひき。

兩、日子香能邇邇藝命天降りまさむとする時に、天之八衢に居て、上は高天原を光し、下は葦原中國を光す神是にあり。

故、天照大神高木神の命以て、天宇受賣神に詔り給はく、「汝は手弱女なれども、い向ふ神と面勝つ神なり。故、專ら汝往きて終に問ふべし、吾御子の天降爲たまふ道に、誰ぞ此の如く居ぞ」と。

故、問ひたまひし時、答へ白さく、「僕は國神、名は猿田毘古神なり。出居る所以は天神の御子天降りますと聞きたる故に、御前に仕奉らむとして參向へ侍ふ」と。

兩、天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊弉許理度賣命、玉祖命、并せて五件緒を支加へて、天降まさしめ給ひき。

於是、其の招請し八尺勾魂、鏡、及草薙劍、亦常世思金神、手力男神、天石門別神を副賜ひて詔りたまひつらく、「此の鏡は專ら我が御魂として吾前を拜くが如く齋き奉りたまへ。次に思金神は前事を取持ちて政爲せたまへ」と。

此二柱の神は佐久久新倍五十鈴の宮に拜祭る。次に登由宇氣神、此は外宮の度合に坐す神なり。次に天石戸別神、亦の名は槿石室神と謂し、亦の名は豊石室神と謂す。此神は御門の神なり。次に手力男神は佐那縣に坐す。

故爾、天津日子香能通靈命は天之石位を離れ、天之八重雲を押し分けて、後威の道別き道別きて、天浮橋に浮じ

まりそり立たして、筑紫の日向の高千穂の久士布流嶽に天降り坐しき。

故爾、天忍日命、天津久米命の二人、天之石觀を取負ひ、頭椎之大刀を取佩き、天之波士弓を取持ち、天之眞鹿

兒矢を手挟み、御前に立たして仕奉りき。

於是、詔り給ひつらく、「此地は韓國竟を通る笠沙之御前に向ひて、朝日の直射す國、夕日の日照る國なり。故、此地

地甚善き地」と。詔給ひて底津石根に官柱太知り高天原に冰檮高知りて坐しませしき。

右、善く讀んで下さい。是から文句を註解しながら、お話を進めませう。其中に於て韓國の理想を御説明し度いと思ひます。

天照大神高木神の命以て云々は。高木神は高御産巢日神の別名です。古事記思想では君臣二元の祖があります。皇天二祖とも言ひます。君の元祖は天之御中主神、臣の元祖は高御産巢日神で何れも隱身で在られましたが、天之御中主神が伊邪那岐命を縁として御身を現はし天照大神と成りました時、高御産巢日神も御身を現し給ひて常に天照大神を輔け奉つたのであります。君臣の分は嚴立して居りますが、大業の目的は一つである。互に相謀り其徳を一にし、大事な詔勅には此大元老高御産巢日神が天照大神に御名を副へられるのであります。高御産巢日神の御末なる伊邪那岐命が天照大神を現はし奉つて假りの父親と尊まれました關係から見ても、高御産巢日神は大伯父様のやうに敬はれ給うたやうである。

天照大神、高御産巢日神は、太子、天忍穗耳命に仰しやるには、建御雷神が歸つて来て、葦原中國はスツカリ平定したと申される、それで前に我が御子の知さん國だといふことをチャンと命令して置いたその通りに、今降つてその葦原中國を知すやうになさい、と仰せられたところが、その太子の天忍穗耳命が申されるには、「私は仰せに従つて天降りしようと思つてその準備をして居りましたが、出雲降伏の爲に八年も掛りましたので、その間に御子が生まれまして。天通岐志國通岐志天津日高日子香能通靈命と申します、この子を私に代つて降す應きだと思ひますと仰しやつた。これは位をお子さんに譲るのには、一にお父様の意思に従ふといふことの先例でありませう。そこで天照大神は天忍穗耳命の仰しやつた通りに、それならといふので、日子香能通靈命に詔を移して、「此の葦原中國は汝知さむ國なりと御父様が仰しやつたから、御命に隨つて天降りなさい」と仰せられた。そこで日子香能通靈命が天降らうとした時に、非常に強く光るものがあつて、上は高天原を光し、下は葦原中國を光すといふのだから、星で言ふと金星のやうな大きなものでせう、それが天之八衢といふから、高天原と葦原中國との境、即ち追分といふやうな所にあつた。そこでこれは一體妨げになるものか、或は爲になるものか、天孫を降すに就てはこれを調べなければならぬといふので、天照大神高木神の命以て、天宇受賣神に「汝は手弱女人なれども、いむかふ神と面勝つ神なり。故、専ら汝往きて將に問ふべし、吾が御子の天降りまさむと爲る道に、誰ぞ此く居るぞ」と詔り給うた。

お前は優しい女だけれども、他の神と面と向つてなか／＼心臓の強い者である。だからお前が一人で行け、さうしてその光るものの所に行つて、天神の御子が天降りますその道に、誰がこんな所に来て道を塞いで居るかと言つて尋ねて来い。斯う仰しやつた譯であります。そこで天宇受賣神はその光るものの所に行つて尋ねると、答へて言ふのに、「僕は國神名は猿田毘古神なり。出で居る所以は、天神の御子天降り坐すと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむとして参向へ待ふぞ」と申した。

即ち自分は葦原中國の神(すなはち國民)であります。名は猿田毘古神と申します。此處に立つて居る譯は、何も怪しい事ではありません。天神の御子がこの葦原中國に天降り遊ばされるといふことを聞いたから、道案内でもして仕奉らうと思つて待つて居るのであると申した。天照大神は今高天原に上つて居らつしやるけれども、本來は日向の

橋小門之阿波岐原といふ所で伊邪那岐命の淨めの行を縁とし出現あらせられたのである。だから葦原中國はつまり天照大神の故郷である。その天照大神のお孫さんが、葦原中國の天皇になつておいでになるといふのだから、猿田比古神の御出向は、葦原中國の者は非常に歓迎申上げて居ることを物語るものであります。

斯ういふ次第で、天孫降臨には非常に好都合であつたのであります。

それで天孫には天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊弉諾理度賣命、玉祖命といふ五伴緒が配属された。即ち天孫降臨の際には、御伴をした者は無数にあつたでせうが、その無数の者を五班に分けて、その五班の班長の名前だけごとくに出て居るので、五伴緒といふのは、つまり五人の班長が供奉して天孫が降臨せられることになつたのであります。

その時に大事な詔が出るのであります。それは「於是、其のをきし八尺勾瓊、鏡、及草葺藝、亦常世思金神、手力男神、天石門別神を副へ賜ひて、詔りたまへらくは、「此の鏡は専ら我が御魂と爲て、吾が前を拜くがごと、いつき奉れ。次に思金神は前の事を取り持ちて、政爲よ」と仰せられた。この御神勅はよく心得て最も慎重に考へて置かなければならぬのであります。古事記には神勅といふものはこれだけしかない。汝知さむ國なり、天降りますべし」といふやうなことはありませんが、教詔としてはこれだけで、これが古事記の中に於て一番重要なもので、日本書紀にもこれ程完全なものはないのであります。それから「此の二柱の神は、佐久久新伊須受能宮に拜きまつる。次に登由宇氣神、此は外宮の度相に坐す神なり」は古事記作者の註でありますが、二柱の神といふのは、鏡と思金神のことでありまして、鏡の方は伊勢の五十鈴の宮に祀つてある、それから思金神は豊受神といふ御神號で以て外宮の度相に祀つてある、だから是は鏡が内宮様で思金神が外宮様だといふ文獻であります。

そこでこの詔を詳しくお話致しますが、「其のをきし八尺勾瓊」の「をきし」は招き祭るといふこと。八尺勾瓊は彌

榮の眞玉で、それは天照大神が御父伊邪那岐命から譲られたところの御頭珠、御倉板舉之神(御位種子の意)を祀つて天位の彌榮をお祈りになつた。即ちお父様の魂をそこに招き祭つて、高天原主たる御使命を怠らぬことを誓はせられた親孝行の玉であります。それが三種の神器の中の一つとなつたのであります。それから鏡ですが、これに就てどういふ事があつたか知りませんが、要するに、天照大神の愛用された鏡であらうと思ひます。それから草葺藝神ですが、これは葦雲神のことで、須佐之男命の獻上品であります。須佐之男命は葦雲の性質を以て出雲の國土を潤し、生物を生長させて行つたところの神様であります。その命が八咫遠呂智族を退治した時に、得られたところの劍が葦雲神であります。その劍を天照大神に献上して、今まで疑はれて居つた自分の誠心のあることを表明致しました。この葦雲神は御鏡と共に伊勢神宮に御座いましたが、十二代景行天皇の御代に、その皇太子の日本武尊がその葦雲神をお受けになつて、その神威を以て東夷征伐に御出になつた。東夷が東海道方面で茅の原を焼いて尊を攻めた時、尊が葦雲神で葺掃つたら、その火が却つて賤の方に廻つて行つたといふ靈驗があつた。草を確いだ劍といふので、其の後は草葺藝と名前が變つたのであります。古事記は第四十三代の元明天皇の時に出来たのでありますから、後の御名で草葺藝と古事記に書いてあります、これが三種の神器であります。

それから常世思金神、手力男神、天石門別神といふのは、これはお伴をして天降りした五伴緒の神とは別であつて、これは天照大神が邇邇藝命に添へ賜つたところの三神の神靈でありまして、生きて居る人ではありません。思金神は高御産巢日神のお子様であつて、この神は非常に智力が高く、全智全能と言つて宜いくらゐる神で、天照大神は何事につけても思金神の智慧をお用ひになつたのであります。それから手力男神は、天照大神のお隠れになつた天石屋戸隠れの時、大神の御手を取つて御引出し申したところの功勞者であります。それから天石門別神は、天石屋戸の側に居つて、衛護仕つた神であります。即ちこの三神の神靈は天照大神から見ればやはり家來であります。その

巨下の忠靈を大御實と敬はせられることを代表したものでありまして、三器三神を通過藝命の實としてお渡しになつたのであります。

天照大御神はその三器三神を副へ賜ひて仰せられるのには、この三つの神器の中で鏡は専ら私の魂として、私が目に見えなくても、この鏡の中に私の魂があるから、本當に自分と直接面謁する如く思つていつき奉りなされと仰せになつた。いつき奉るといふのは、心身を淨めて、敬ひ事へて神人一體の境地になることであります。これはどういふ意味かといふと、祖先の志（天業）を繼ぎ弘めることを片時も忘れぬやうに努めることが眞の孝行である。其爲に御鏡をいつき祭るのである。孝行に依つてのみ明德は明かにすることが出来る。それ故に此所は孝祖を教へられたのであります。それから次に思金神の方の取扱はどうするかといふことを教へられた。前（註）の事を取り持ちてといふのだから、所謂御實前によく取り持つて丁寧にお祭りをしてといふこと。さうして政爲せよといふのは、天皇がヒトラ一かムツリ一のやうに、自分で何でもかんでも手出しをして政をすることは日本にはない。これは漢語で爲政と書いてあるけれども、本當は萬機をみそなはずやうにといふ意味であります。だから 天皇を輔翼する、所謂今で言ふと大臣のやうなものが、さういふ人の忠靈を尊敬する心持を以て政事を視そなはず（知しめず）やうにと敬神を教へられた譯であります。

それでこの思金神の方のことは、原文が次思金神者取前事爲政と十一字しか無い。言葉が足りない爲か大變讀みにくいで、國學者はこの説明を避けて居るのですが、思ひ切つて言ふ人は、「次に思金神よ。お前はこの御鏡を通過藝命が奉齋するその心持を取り持つて、即ちそれのお世話をして政を爲せ」と斯ういふ風に解釋するけれども、此十一字は通過藝命に仰せられた御言葉の続きであつて、「次に思金神に詔り給はく」ではない。況んや思金神は伊勢の外宮にお祭りして、天皇が御親祭遊ばされる程の尊い神様でありますから、この神勅の後半十一字はやはり思金神を尊敬せよと敬神の教に取らなければいけないのであります。

それ故に天皇として持たねばならぬところの御徳といふものは、天皇は祖先をいつき奉つて明德を養ふことが必要である。また天皇は輔弼の巨下の忠靈といふものは決して忽せしてはならぬ、丁寧これを尊敬して祭らねばならぬ。この二つの御徳を持たなければならぬのであります。これを私は「孝祖敬神」と稱んで居ります。

伊勢の外宮は、御祭神は思金神でありまして、この神は全智全能の神様であつたから、後になつて食物が非常に必要であるといふやうな政治の現状の時には、食物の神として外宮を取扱つたこともある。今で言つたならば、臣民の經濟的總努力の結晶、それが思金神の名前に集つて神徳を現はして居るといふ風な理窟がつけられると思ひます。要するにモウ少し簡單に言へば、伊勢の外宮は政治の神様だといふことになるのであります。だから伊勢に大臣などが就任奉告に行きますが、内宮に就任奉告をする心持は解つて居りませうが、外宮を拜む時に何も譯を知らないで、これは五穀の神様だといふので、米の精に頭を下げて歸つて来る人がありはしないかと思つて心配して居るのですが、伊勢に行つて外宮に参拜する時には、自分等の祖先先輩が思金神に従つて忠の力を天皇に盡したところの、その政治の神様を拜むのだと、このやうなハツキリした頭腦を持って拜んで來なければならぬと思ふのであります。

この詔が孝祖敬神の詔であります。崇祖敬神の詔とも言ひ得るのであります。祭政一致の由來する所であります。神武天皇は之を「皇孫養正の心」と申されたから、養正の神勅と稱しましても善いと思ひます。

扱て孝行は親孝行が初歩でありまして、祖先に貫く孝行即ち孝祖といふのが孝行の中でも一番立派な大孝であります。これは法華經を習つて居る人はよく判ることです。

孝祖敬神といふことは天皇として缺くべからざる道の詔を受けて、天津日子香能通過藝命はお暇乞ひをして、天照大御神の御殿から離れて、天之八重多那雲を押し分けて、さうして威風堂々と天降りに成つた。「天津浮橋にうきじまり



そりたたして」といふのでありますから、大な飛行船のやうに。フワリ／＼浮島然たるものにそり身に御立ちになつて、御安かに天からお降りになつた。さうして筑紫日向之高千穂久士布流多氣といふ所に著御になつたといふことであります。そんな事が出来るものかと言ふのは、それは所謂三角頭で神話を考へる資格のない人ですが、天孫の御降臨が實に堂々たる行列であつたといふ事を思はなければならぬのであります。

そこで日向之高千穂之久士布流多氣にお降りになつて通瀬命は何と仰しやつたかといふと、これがまた非常に面白いのであります。「此地は韓國竟き通る笠沙之御前に向ひて、朝日の直射す國、夕日の日照る國なり。故れ此地ぞ甚善き地」と語りたまひて、底津石根に宮柱ふとしり、高天原に水椽たかしりて坐しましき。と書いてあります。この偉大な文學に纏められて居る思想内容を解釋しませうならば、「この高千穂の地は誠に展望が宜しい。あれ／＼向ふの笠沙の岬は遠く突き出でて居る。外國まで通して往けるらしい。天照大御神に授かつた天葉を弘めるに便利である。また日向の國は天照大御神の御生地である。其の御光は朝な夕なに直接滲かい御加護と成るで有らう。此地が一番善い處だ」と御使命遂行の雄志と親思ひの孝心とを胸一杯に湛へてお喜びになり、皇居を營まれました。皇宮に底津石根の宮柱を立てた、所謂地面の底の岩盤に届くやうに柱を立て、さうして屋根の棟木の上にある千木が、高天原まで届きさうな高い建築をして其處においでになつたのですが、そんな大きな家が山の上に来るものではないと言はれる人があるかも知れないけれども、精神的にはそれほど大きい基礎の固い堂々たる宮を造つて、天下を治したといふことになるのである。何と讀んで居ても實に愉快ではないか。古事記を作つた人が、よくもこれだけの名文を整へて呉れたものであると思つて感心する次第であります。

天孫降臨の條本文講義は終りました。

そこで天孫降臨の條をモウ一度考へて見ると、五つ通りに分けられるのであります。第一は、天照大御神が國を授ける語は先づ天忍穗耳命に下つた。然るに太子の御代に於ては、出雲平定に時日を要した爲に、太子は御子がお生れになつたに依つて、その御子たる通瀬命が葦原中國に御降臨せしめらるべしと奏上になつた。即ち皇位の譲渡は、在位天皇の御意思に依るといふ嚴格なる先例がこゝに出來た譯であります。それから第二は狹田毘古神が國神として、天之八咫に天孫の降臨を出迎へたといふことは、葦原中國の者が、天孫降臨を一同喜んで迎へて、天孫に仕へる事を誓つて居ることを代表するのであります。それから第三は皇孫に供奉したところの五伴緒の神その他大勢の天神が天降つて、國神と一致協力して忠勤を勵まれた譯である。これ等の天神、國神が我等の祖先であります。その神々を一つに纏めれば思金神であります。斯ういふ神々を八百萬の神と申して天子は敬ひ遊ばされて居るのである。我等は斯ういふ祖先を持つて居るといふことを考へると、自然に孝心を以て祖先の爲したところの忠勤の精神を受継ぐことを、非常に光榮とする者であります。それから第四は三器三神を添へ賜つたが、この三神は供奉の神とは違ふので、はじめ天照大御神の功勞神であつたが、今は御靈代となつて居るが、その御靈代となつて居る神々を輔翼の神の祖として賜つたのである。それで天照大御神は三器中専ら御鏡に因せて孝祖を教へたまひ、三神中専ら思金神に因せて敬神を教へたまうた。孝祖敬神は天皇道であります。天皇の道統として永遠に守らせられるところであります。古事記の註する所に依ると、伊勢神宮の内宮は御鏡、外宮は思金神であります。此は君臣二元靈であります。御代を重ねれば同じ孝敬の道は、現に宮城内御齋祭の如く、皇靈殿（歷代皇靈）と神殿（歷世忠靈）とに成ります。それから第五は外國までも通するばかりの笠沙之御前があつて、朝日も直射し夕方方もよく當る絶好の地であると言つて、そこを高千穂峯と定められた、これは即ち祖宗の威烈を被つて天葉恢弘、天下光宅するといふことを現はして居るのであります。先輩の國學者は、韓國を譯して「齊穴の空國」と申して居りますが、これは素直に讀まないからそんな間違つたことを言ふので、領國侮外の固陋頑冥な思想があつた爲に無理やりに解釋し、日本書紀に降参したものでありま

す。本居宣長先生などは外國の教を受けなくても日本には日本の教がチャンとあるといふ勢ひで、外國といふものを非常に輕蔑したのであつて、朝鮮などといふ國は膏粱の空國だ。尻でも嘗めろといふくらゐ汚い空しい國だ、さういふ汚い所をズツと通り過ぎて、探検に探検して漸く高千穂峯に著いたのだ、即ち一番いい所に漸く著いたのだ、斯ういふ風に昔の國學者などは解釋をして居る。それは落第だ。徳川時代の國學者が出た時分は、佛敎や儒敎に厭きて、日本の善い所を現はさうとした事は悪くないけれども、さういふ偏した頭腦を以て古事記を讀んだから、さういふ事になつたのである。太安萬侶朝臣が著述した時には、勿論さういふ考ではなかつたので、そこは私の申す方が正しいのであります。

以上五項を見ましたが、其外にも日本として大事なことをいろいろ細かに言つたならば、あれも日本の美點である、これも日本の美點であるといふやうに幾らもありませんが、その中で一番大事なのは、やはり第四項御位定めの時、孝祖敬神といふ道統を垂れさせられた事である。所謂正を養ひ徳を樹てるといふことがこれでありませう。正とは具體的に何かと言ふと、立正安國の正も同じですが、天皇が上は久遠實成の天照大御神を奉ずる、下は萬民菩薩行の忠靈を敬ひ給ふの事實を正と申します。この二つの心は天皇ばかりではない、臣民にも當嵌まる原則であります。長くも天皇御一人が標準と成つてそれをなさる。そこで明德を明にして徳を樹て、億兆を撫育して、皆の心をして皇室を守るところの精神に一致せしめる御力と成つて居らせらる。かくして實祚は彌榮えますのである。皇統が萬世一系だといふことを國體とするならば、道統の孝祖敬神といふことは國體の生命である。この孝祖敬神がなかつたならば、幾ら萬世一系を望んでも支那の歴史に見る通り、それは潰れてしまふ。けれども古事記にある天照大神のタツタ一つの詔、即ち孝祖敬神が國體の生命である。だから皇統の方を授國の勅と言ひ、道統の方を養正の勅と申上げて宜いのである。神武天皇が「上ハ則チ乾靈國ヲ授ケタマフノ徳ニ答ヘ、下ハ則チ皇孫正ヲ養フノ心ヲ弘ムベシ」と仰せられ

たのは、此事であります。

要するに愈々葦原中國の主をお定めになる時に、孝祖敬神の教をなさつたといふことが肇國式であります。何故に斯様に懇切莊嚴なる肇國式が行はれたかを考へて見なければならぬのですが、天照大御神と申すのは日本語です。斯ういふ言葉に似た言葉で、法華經の中には慧日大聖尊とある、或は聖主天中天といふこともある、これは佛様のことを言ふのです。だから天照大御神と日本語で申上げますけれども、それはやはり宇宙を照す神様であつて、世界の人類乃至一切衆生を普く恵みたまふところのお方様でありますから、その點は宗教で考へて居るところの天主、或は天帝、本佛などと申上げるのと天照大御神は同じであります。併し宗教の神と天照大御神と違ふ所は、宗教の神は僧を濁世に送つて、僧をして態々悪くなつた國を救はしめることをなさるのであるが、天照大御神はさうではない。濁世でない清淨なる一つの國を造り上げて、それを中心として世界を感化しようといふ方法をお採りになつたところに違ひがあるのであります。日蓮上人などは、其のやうな日本國に生れたといふことは何より幸福だ、兩眼瀧の如しと言つて喜んで居られる。幾ら神の一人子でも、或は本化の菩薩でも、はじめから出來損ひの國にやつて來て、人類救済、衆生教化と言つても、それは出來ない相談なのであります。だからどうしても國の力を俟たなければいけない。そこで國は善い國を選ばなければならぬ。而もその統治者の覺悟といふものは、世界主たるころの神様の御心にピッタリ合つたところの御信仰がなければ駄目であります。それでなければ模範國にはならない。そこで天照大御神は、この葦原中國といふ國を選んで、此處を直系御子孫をして治めさせる、その統治の極意として「一事依したまへる神聖の大使命を畏こみ、片時も祖宗を忘れ給はず、常に輔翼の忠靈を敬ひ給ふこと」を教へて、斯くも嚴肅なる肇國式が行はれた譯であります。だから肇國式といふものは日本の國體の生命を呼び込んだものであります。

斯ういふ譯で日本が出來たのですが、これが日本肇國式であります。日本の皇室はどんな教でも外國から取入れて國

を發達させるのでありますが、たゞ孝敬二道といふものだけではどうしても動かない、これに副はない教は撥ねつけてしまへば宜い。

新ういふ風にして出來た日本の國、日本の皇室ですが、日向御三代を経て神武天皇の時になりますと、建設的に國を肇められたから、孝祖敬神の御事が具體的歴史的に實行されました、神話はたゞの神話でなく、神話が神武天皇にピタリと映つて來て居るといふことが解つて愉快に思ひます。それがズツト守られて來て、御蔭で臣民は克く忠孝を勵み、世々厥の美を濟して居るのであります。とは言へ道に顯晦あり世に汚隆あり、明治維新に成るまで二千五百有餘年の間、實は國內試鍊時代でありました。明治天皇が御即位早々御宸翰を發布せられ、「朕幼弱を以て猝に大統を紹ぎ、爾來何を以て萬國に對立し列祖に事へ奉らんやと朝夕恐懼に堪へざるなり」と仰せになつた熾烈なる孝祖の大御心は、御在位四十六年間御緩みなく貫き遊ばされた。この御事が常に御統治の御力となりまして國運は未曾有の隆昌を致しました。是を思へば私は尊くも神々しくて恐ろしくさへ覺えます。他日の機會に、明治天皇様のお話致しませう。肇國の理想を以て天業恢弘するのは是からだ。日本はどうしても世界の模範國に成らねばならぬ。追つて世界の人が日本に頭を低げて禮拜するやうに成りませう。(終)

## 附記

附録として、日本書紀中、古事記に掲げてない神勅に關したお説明があるのですが、紙数の關係上、尚に遺憾であります。今は割愛させて頂きます。(滿生)

## 八紘一字と四海同胞

## 河合 陟 明

天祖天照大神の天壤無窮の神勅に淵源して、神武肇國よりこのかた、萬世一系の皇室を奉じて、こゝに皇紀二千六百年といふ、我が大日本民族のみの有する最高の矜持にして、宇内萬邦中最も光輝ある年を、我等は迎ふるに至つた。

一百年前は、まさに天保十一年に當り、幕末物情騒然として、内外すこぶる多事、維新回天の「その前夜」に際し、勤王家中の錚々たる憂國の志士藤田東湖をして

鳳歴二千五百春 乾坤依舊眼光新

今朝重感緣何事 便是權原即位辰

と詠せしめたことであるが、今や百年後の今日は、彼等身と君國に許し王事に奔走して、しかも空しく惆悵の露と消えた志士の靈をして、果然大陸アジアの戰場に馳驅せしめ、祖國萬古の皇猷たる、天業恢弘八紘一字の大業を、人文史上の大轉換期、世界を擧げて未曾有なる國際難局の間に、經綸せしめつゝある。日本國家そのもの、一世紀間における驚くべき

國運の變遷は、やがて世界史の上にも新たな黎明を齎すに至るであらう。昭和維新、皇國維新は、やがてまたアジアの維新、世界の維新であらねばならぬ、と予は信ずる。

帝國が東に皇道の聖戰、アジア再建の大業に、國家總力を擧げて一路邁往しつゝある時、果然西歐の天地に於ても、曾ての大戦以來、僅かに四分の一世紀の後の今、再び第二次大戦が勃發し、その前哨戰的序幕の裡に、風雲は暗濛として低迷してゐる。

「人類の歴史における國家存在の意義は、一定の役割或は任務を成し遂げてやがて滅び、次で他に替るものである」と論ずる思想家もあり、シュベングラールは「支那の如き老大且つ老衰國は、再び文化創造の氣力なく、國家再興の民族的能力がない」と論じ、しかのみならず實に自己の祖國の地たる「西洋の没落」をすら叫んでゐるのである。

「萬物は流轉し、而て戰は萬物の父である」とは、ギリシヤ

の昔よりヘラクライトスの唱へたところであり、而てかくの如き人類の歴史における矛盾相剋の悲劇を、一面に於て肯定しつゝ、他面に於て和解するゆゑんの道として、近世におけるヘーゲル及びマルクスの物・心全く相反するものではあるが、辨證法の論理が生み出されたのである。

さてこれらの諸の見解は、果して肯定せらるべきものであらうか。戦が萬物特に人類の真相として不可抗の運命であるのであらうか。それは一面に於て然りといふべく、他面に於ては否と答へねばならぬ。何となれば國家存在の意義、文化の意義、その永續性の如何は、一にその國家の理想、文化の理想、そのものに懸つて存するからである。今や東西兩洋に亘つて行はれつゝある戦は、その内面的意義に於てすこぶ異なるものであるが、然しながら人類がその同胞相食むの悲惨事に至つては、等しくして異なるところがない。

こゝに於て予は、この世界史の現實を凝視しつゝ、人類同胞の理想なるものに關して、少しく考へてみたいと思ふ。

元來、同胞の觀念は、まづ血族の繋りとして家族關係に始まることはいふまでもない。然しながらかくの如き事實に對して、一般に高尚なる道德、哲學、及び宗教の立場に於ては、例へば基督教の四海皆兄弟といひ、キリスト教の、人は皆神の子として相愛すべし、といひ、或は人道主義、共存共榮といふ如き、理想に根據した同胞思想が唱へられるのである。更に

道は、眞實在を究明せる哲學でもなく、また純粹の宗教でもない、更に又これを、基督教やキリスト教や西洋諸哲學等に尋ねても、未だ十全なる満足を求むることはできない。吾人は實に、佛教に於てのみ之を見出すことができるのである。

そも、佛教の同胞思想はいかなるものであらうか。けだし佛教の同胞觀は、まづ第一に釋尊成道の利那に始まり、その内容を開展して二門となり、これを第三門によつて統一し、更に進んで第四門に至つて、最初二門の意義を完成し、翻つて第三門の統一的大理想に自らまた歸趣し、或はこれを自己に體現してこゝに同胞思想そのもの、本來の要求或は意味を、全く充足するに至るのである。

元來、佛教は、一切の生類の、生命の實在を明かにし、その生命の内容としての本質及び力用を明し、また更にそれに伴ひそれを一貫する、流轉と向上との法則を明かにして、そこに生命本然の欲求即ち價值を、實現せしめんとするところに成立したのである。

まづ釋尊成道の風光は、阿含の教誡より涅槃の遺訓に至るまで、大千の經卷悉く大覺一念の内容を説き出されたものなのであるが、その開覺の利那における佛陀の大知見中に、明かに深遠なる同胞思想が現れて來るのであつて、これを佛傳文學として有名なる「佛所行讚」の中に馬鳴は左の如く述べてゐる。

又、我が日本國家の如きは、世界に於て最も鞏固なる團結をなしてゐるのであるが、これには由來、日本民族は皇室を中心とした一大家族である、といふ家族國家の觀念が根柢をなしてゐる、といはれ、この同祖同族であるといふ歴史的事實に根據して、いはゆる一億一心の同胞思想が成立すると見られてゐる。これは最初の血族としての同胞の事實を、國家・民族・及びその歴史といふ範圍にまで擴大し、又こゝに限定しての同胞觀であるが、しかしかくの如き觀念は、一度びその範圍を超へて、他民族・他國家・他人種等に及ぼしたとき、果していかなるものとなるであらうか、かゝる家族國家の觀念が、果して能く我が日本國家、殊に國體の眞意義を道破したものであらうか、日本國家と歴史の特質は、他國家民族の歴史と異りて、もとより之を明かに認めねばならぬが、しかし單にかゝる思想のみを以て、遍く世界を承服せしめ八紘一字といふ如き全人類包容の天業を恢弘することができらうか。

すべて偉大なる聖業の達成には、常に崇高なる理想を要求することいふまでもなく、むしろ偉大なる業とは、崇高なる理想の實現を意味するのである。而てかくの如き理想は、宇宙人生の實相を照破した、哲理に根據せる道德的・宗教的大理想でなければならぬ。かゝる哲學的宗教的高遠の理想を、吾人は果していづこに求め得るであらうか。いはゆる惟神の

菩薩降魔しをはつて、志固く心安穩に、第一義を求め盡して、深妙禪に入り、自在の諸三昧、次第に現在前す、初夜に正受に入り、過去生を憶念するに、某處某名より、而も此に來生す、是の如くなること百千萬、死生悉く了知す、生死を受くること無量にして、一切衆生の類は、悉く曾て親屬たり、而て大悲心を起し、大悲心念じをはつて、又彼の衆生を觀するに、六趣の中に輪廻して、生死窮極無く、虚偽にして堅固なること無く、芭蕉夢幻の如し、即ち一切の生類は、悠久なる過去無限の生命中に於て、互に親屬であり家族であり同胞であつたのであり、かくの如き同胞としての全生類を、悉く慈悲救濟せんとするところに、佛陀の縱横五十年の教化活動は開かれて行つたのであつて、かゝる同胞觀を、佛陀釋尊の成道および轉法輪の第一歩と見るところに、佛教は興起したものであるといはなければならぬ。而してこの意味は、實に佛説一代の始中終を結了した法華經に於ても、また明かに説かれてゐるのであつて、その方便品に云く

舍利弗よ當に知るべし、我れ佛眼を以て觀じて、六道の衆生を見るに、貧窮にして福慧無く、生死の險道に入つて相續して苦斷えず、深く五欲に著すること、犛牛の尾を愛するが如し、貧愛を以て自ら蔽ひ、盲瞶にして見る所無し。大勢の佛、及び斷苦の法を求めず、深く諸の邪見に入

つて 苦を以て苦を捨てんと欲せり。是の衆生の爲の故に  
 而も大悲心を起しき 我始め道場に坐し 樹を觀じて亦  
 經行し 三七日の中に於て 是の如き事を思惟しき 我が  
 所得の智慧は 微妙にして最第一なり 衆生の諸根鈍にし  
 て 樂に著し痴に盲ひらる 斯くの如きの類 云何にして  
 か度すべきと

佛陀の正覺は 根本佛教に於て 普通に 十二緣起の順逆  
 兩觀であり これを四諦に約説せられたものである といは  
 れてゐるが、この無明を根本として 十二緣起によつて把握  
 せらるゝ生命の存在を 無限の過去に溯つて諦觀し その生  
 死流轉の輪廻界中に現るゝ 悠久の生命觀の裡に 佛教にお  
 ける深遠なる同胞思想が含まれてゐるのであつて、この神祕  
 的同胞觀よりして 或は食肉を斷じ 殺生を禁ずる いはゆる  
 斷肉・禁殺の思想となり、積極的には 放生即ち生物を愛  
 護する思想となり、かの智者大師が天台山における修行中に  
 も しばしば 放生會を修せられたるが如く、又我が朝廷に於  
 ても しばしば 放生會を行はれたるが如く、更にその生命の  
 根本に反省して 知恩報恩の觀念となり 下に慈悲同行の精  
 神となるに至つたのである。それゆゑ五戒の最初にも不殺生  
 であり 十重禁戒の最初にも不殺生であり 六波羅蜜の第一  
 は布施波羅蜜となり 乃至 慈悲喜捨の四無量心 或は愛  
 語・利行・同事・等事の四攝事となる等 大小乘を通じて修

道實踐の幾多の項目が生れて來たのである。

生命觀は慈悲觀であり 生命觀は報恩觀である、生即愛の  
 説も生るゝゆゑである。生を惠むことは もとより人間本  
 然の欲求であつて 何れの道徳や宗教にも共通であるが、佛  
 教は一層深い生命の實在性に反省して そこより現在の生を  
 惠み 生に報するのである。「萬物は無形の絲で繋がれてゐ  
 る」と ギリシヤの古哲プロチノスは説いたが、佛教は深き  
 生命の由來 その根本的諦觀のうちに 神祕にして温かなる  
 因縁の血を流した 大同胞觀を生み出して來たのである。  
 かくしてこの思想はその當然の發展として、かの有名なる  
 菩薩戒經にはゆる

若(なんぢ)佛子よ 慈心を以ての故に 放生の業を行ぜ  
 よ、應に是の念を作すべし 一切の男子は是れ我が父 一  
 切の女人は是れ我が母なり 我れ生々々に之に従つて生を受  
 けずといふことなし 故に六道の衆生は皆是れ我が父母な  
 り、(乃至) 一切の地水は是れ我が先身 一切の火風は是  
 れ我が本體なり 故に常に放生を行じ 常に教化し菩薩戒  
 を講説して 衆生を救度せよ、若し父母兄弟死亡の日は  
 應に法師を請じて菩薩戒經の律を講じ 福をもつて亡者を  
 資け 諸佛を見たてまつることを得て 人天の上に生ぜし  
 むべし  
 といふ思想となつて、自ら生かさるゝのみならず 他をも生

かし 生者を愛護するのみならず 死者をも濟度し、殊に  
 「一切の男子は是れ我が父 一切の女人は是れ我が母」「六道  
 の衆生は皆是れ我が父母」といふ如き説教は 一般に佛教を  
 信奉する人々に偉大たる感化を興へたものであり、しかもた  
 らに人類相互の間における同胞觀のみならず 六道の生類ま  
 でも亦悉く同胞とし、更にはゆる非情の心無き地水火風  
 草木瓦礫に至るまで 皆おしなべて我が同胞觀の中に入り來  
 たるに至り、この思想は更に進んで 遂に四恩の説として

心地觀經に現るゝに至つたのである。菩薩戒經(或は梵網經  
 ともいふ)は 大乘思想に立つた道徳律の代表的なるもので  
 あつて、高遠なる菩薩的生活の道徳軌範を説かれたものであ  
 るが、今この心地觀經に來つては、宇宙の一切を恩化して  
 そこに四恩を立てるに至り、父母と國王と一切衆生と三寶の  
 恩を高調力説して

菩薩は正慧力を以ての故に 父母及び諸の衆生を度せんが  
 爲に 同體の大慈悲心を激發し 大菩提を求め 四恩を報  
 じて四徳を成就せんが爲の故に 出家修學す  
 と教へられてゐる。一切衆生に對して自己と同體なりとの  
 大慈悲心を激發する 同胞思想より報恩道徳への轉回むしろ  
 發展は 實にこの四恩説によるのであり、同時にこの四恩報  
 答の思想によりて 一切同胞の觀念は 因縁の親疎に従つて  
 正しく秩序づけられるゝに至つたのである。この四恩の説は實

に佛教永遠の誇であり 古來佛教史上否一般の人々に對して  
 も今も尙ほ大感化を及ぼしてゐるのである。予がさきに佛教  
 における同胞思想として四門の論も またこの四恩の觀念に  
 よつて統一することができたのであつて 後にこの點に論及  
 するであらう。この經に來れた同胞思想は まづ父母の恩を  
 説いて 次で衆生の恩に進み その恩の根據を明かにして  
 次の如く説かれてゐる、

善男子よ 衆生恩とは 即ち無始よりこのかた一切衆生五  
 道に輪轉して百千劫を経たり、多生の中に於て互に父母と  
 爲る 互に父母と爲るを以ての故に 一切の男子は即ち是  
 れ慈父 一切の女人は即ち是れ慈母なり、昔生々中に大恩  
 有るが故に 猶ほ現在の父母の如く 等しくして差別無  
 し、是の如き昔の恩 猶ほ未だ報すること能はず、或は妄  
 業に因つて諸の違順を生じ 執著を以ての故に反つて其の  
 怨みと爲る、何を以ての故に、無明は宿住の智明を覆障し  
 て 前生曾て父母たりしことを了せしめず 報恩すべき所  
 なれば互に饒益を爲せよ、饒益無き者は名けて不孝と爲  
 す、是の因縁を以て諸の衆生類は 一切時に於て亦大恩有  
 り 實に報すること難しと爲す 是の如きの事を 衆生恩  
 と名づく

一度び生命の實相が明かになれば いはゆる父母の觀念も  
 また擴大されるのであつて、もとよりそれは吾人の認識を超

越して 肉眼に映ぜざるものであるが 實在の理よりすれば、まさしく眞實でなければならぬ。而てたゞに父母のみではない、妻子兄弟眷屬故舊等、無量の關係を、過去無量生の間に宿して來たものである、その間に受け來つた深大なる恩義が、實に同胞思想の根本的觀念をなすのである。この深大の恩義に對して、今猶ほ反道徳的の生活を續けてゐるといふことは、まことに淺ましいことといはねばならぬ、故に速かにこの人生の深き根柢に反省して、同胞相愛する報恩の態度に出づべきである、といふのである。傳教大師の長講法華經願文にも、又この思想は明かに述べられてゐるのであつて、實に古來幾千年の佛敎史上の史實と通念であるのである。

こゝに於て、佛敎の同胞思想は、まづ生命の實在を明かにして、その悠久なる多生の間に互る、神祕的家族主義ともいふべき、實相を説くところに成立つのであつて、神祕的なると同時に、最も合理的であるといはなければならぬ。而してかゝる合理的にして且つ神祕的なる家族主義は、たゞに人類の間にのみ限られるのでなくして、動物乃至六道一切の生類にまで互り、尙ほいはゆる非情の自然界の萬物までも、悉く我が同胞と觀るに至り、遂にこれらの一切を恩化する、衆生恩を高調するところに達したのである。従つてこゝには、もはや一民族・一國家・一人種とか人類相互とか、同教徒・同信者とかの間にのみ限られるといふ如きものでなく、殆ど無制

限にその同胞思想を擴大してゐるのであつて、實に宇宙的家族主義といふべきものである。而してこれは衆生の生命の輪廻する方面より觀たる同胞思想であつて、これを佛敎同胞觀の第一門と、予は稱するのである。

それでは第二門における同胞思想とは何んであるか。それは人類、乃至、一切の生類の價值的本質を認識し、これを無限に開發し實現せんとするところに成立つ同胞思想である。さきの輪廻觀に由來する同胞思想に對して、これは解脱界への方向に於て見出さるゝ同胞觀であり、その解脱を實現すべき價值的本質とは、即ち衆生本具の佛性のことに外ならぬ。無明に由來する輪廻界の衆生が、無量の差別相を生じて、無量品の無明といはるゝに反し、その無明を斷破して、やがては解脱の當體たるべき佛性實現の側より衆生を觀れば、その實現の程度や方法や價値に於て、また千萬の差別あり、無量の個性的人格を現出するのではあるが、佛性といふ點に於て等しく一如し、その究極目的に於てまた一如し、その實現の方法たる因果の法則に於てもまた一如する、即ちその根柢と過程と完成とに互つて、等しく皆一如する。これを一代聖敎の歸結たる法華經・涅槃經に説いて

一相一味、いはゆる解脱相、離相、滅相なり、究竟して一切衆生悉有佛性、といひ

開佛知見、示佛知見、悟佛知見、入佛知見道、といひ  
一佛乘の一切種智を得せしめんが爲の故なり、といひ  
二乗作佛、女人惡人成佛、乃至、十界授記、十界皆成と稱するのである。而てこれまた、釋尊成道の際における、正覺の内容として、佛眼を以て一切世間の衆生を觀見せられたる、蓮池觀に由來し、梵天の勸請を容れて、衆生のために不滅の門を開くべく、往いて鹿苑に初めて法輪を轉じ、五比丘、乃至、六十の比丘を四方に傳道せしめられたる時の梵音に由來し、かくて大部部における、心性本淨の説となり、大乘佛敎の無漏種子となり、佛性論となり、如來藏説となり、その發展の極まるところ、五性各別・三乘隔歴の差別見を開會して、法華涅槃の究竟了義説となるに至つたものである。

比丘等よ、我は一切人天の縛を解脱したり、比丘等よ、汝等も亦一切人天の縛を解脱したり、汝等遊化せよ、多人の幸福のために、多人の安樂のために、世間の憐愍のために、人天の利益幸福安樂のために、同一の道を二人して行く勿れ。比丘等よ、始めも善く中も善く終りも善く、義あり文あり、特に究く淨潔なる法を説け、また淨行を明かにせよ。世には汚れ少き生を受けたる衆生もあらん、彼等は法を聞かずば遂に滅亡せん、彼等は法を知る者とならざるべからず。(戒因緣章)

かくの如きものこそ、實に佛陀釋尊が、大法の宣揚を世に宣言せられたる、第一の師子吼であり、而て佛敎傳道の根本精神であつた。この精神は後世に、四方宣敎の大事として、人類歴史を動かしたる大勢力を作り出したものである。

既にかくの如く、人類、乃至、一切生類の、無始の生命の實相を明かにして、その無限輪廻の間における、生々蒼々の衆生恩と、その絶えざる解脱界への方向における、佛性開發の向上と、即ち流轉門と一如門との二面よりして、佛敎における同胞思想を論じ來つたのであるが、かゝる反價值的と價值的と、迷妄と眞實との、無始以來の二面の實相に對して、これを眞に具體的に救済するものは何であるか。既に生死輪廻と解脱修道との二門の諦觀より、全生類同胞の意義は、明かなる事實としてこれを認め、更に進んで、かゝる一切同胞の事實に對し、否たゞに二面の實相ではない、反價値より價値へ、迷妄より眞實へ、無限向上への途上にある、一實諦の衆生に對して、この一切の同胞を指導するものは何物であるか。かゝる指導者・救済者は、また指導せらるゝものと等しく同胞でありつゝ、しかも全き指導救済の能力を有するものでなければならぬ。導く者は、導かるゝ者と、その本質・根柢を等しくしつゝ、しかも一切を導き救ふ上において、まさに全能の力を發揮するものでなければならぬ。こゝに、我れ本、誓願を立て、一切の衆をして、我が如く等しく

して異なること無からしめんと欲しき、一切衆生を化して皆佛道に入らしむ、諸佛の本誓願は、我が所行の佛道を、普く衆生をして、亦同じく此の道を得せしめんと欲す、諸佛兩足尊は、法は常に無性なり、佛種は縁に従つて起ると知ろしめす、是の故に一乘を説きたまふ、是の法は法位に住して、世間の相は常住なり

といふ述門説よりその活動を無限の時空に展開し統一したる我れ佛を得てよりこのかた、經たる所の諸の劫數、無量百千萬億載阿僧祇なり、常に法を説いて、無數億の衆生を教化して、佛道に入らしむ、それよりこのかた無量劫なり

といふ壽量顯本の妙談、即ち無始本佛常住の大教義に達せねばならぬゆゑんの道が存するのである。輪廻より解脱への衆生の生命・衆生の動向が、無始以來の實相なるに對して、これを利導救濟する佛陀そのものも亦、無始本有の實在者でなければならぬ、かくして始めて、全能者の全能者たるゆゑんの意義を充足するのである。しかもそれは決して單に獨斷的に肯定せらるゝのではない、極めて嚴密かつ明晰なる純理に根據して、しかもかくの如き實踐的要求、全人格的要求を充足せしめてゐるのである。

彼に於て求められたる不可知的絕對の神より、我自らの内に面に發見せられたる絕對の本佛へ、またその我自らの内に於て眞空無相より妙有實相へ、觀心眞如より觀心本尊へ、非

人格的宇宙の絕對より、個性に即して宇宙を包攝したる人格實在の絕對へ、可能的絕對より現實的絕對へ、理法的絕對者より法體現の人格的絕對・自覺的絕對へ、內在に根據しつゝ超越的全能の絕對者へ、個より全へ、時に於てあるものより時を包むものへ、修道の始覺行より證果の本覺へ、自覺より覺他へ、自力より他力へ、自他合力の合成へ、かくの如きものが、實に人類思想史の大觀であり、また實在探究・眞理發見の途上における、人類求道の根本的傾向であり、而てこの間に於て、人文史上における大聖釋尊と日蓮聖人との二大人格が、永遠不滅の意義、光明を發揮せらるゝことを、知るのである。

これらの詳細は、更に嚴密に論明せられねばならぬ、予もまたこれを志しゐる者である。

さて佛敎における同胞思想は、最初の二門を統一する第三の、この本佛無始の實在を以て、既に終を告げたといふべきであらうか。否今一つ最後の二門がある。それは何であるか

日蓮聖人は依法華經可延定業書に示して云く  
命と申す物は一身第一の珍寶なり、一日なりともこれを延ぶるならば千萬兩の黄金にも過ぎたり、法華經の一代の聖敎に超過していみじきと申すは、壽量品の故ぞがし、本門戒體抄に説いて云く  
第一に不殺生戒とは、爾前の諸經の心は、佛は不殺生戒を

持つと説けり、然りと雖も法華經の心は、爾前の佛は殺生第一なり、ゆゑんは如何、爾前の佛は、一往世間の不殺生戒を持つに似たりと雖も、未だ出世の不殺生戒を持たず、二乘・聞提・無性有情等の九界の衆生を殺して、成佛せしめず、能化の佛すら未だ殺生罪を免れず、いかに況んや所化の弟子をや。然るを今經は悉く成佛せしむ、今身より佛身に至るまで、爾前の殺生罪を捨て、法華壽量品の久遠の不殺生戒を持つや否や、持つと(三返)

即ち一切生類をして、本佛無始の常壽を、亦同じく獲得體現せしめることが、實に佛敎における同胞思想の、最後の甘露門である。而も成佛とは我等の人格の絕對完成であるが、衆生救濟の佛陀的生活は窮み無く之を實現するのである。

每自作是念、以何令衆生、得入無上道、速成就佛身、願我於未來、長壽度衆生、乃至、說壽亦如是

かくして佛敎に於て、生死流轉門と、佛性一如門とは、同胞思想の根據であり、且つ相關對應し、而て前者より後者に進んで、この二門、乃至、一實諸門における、全生類同胞の思想を、充實完成せしめるものとして、こゝに本佛常住の大事實に進み、而してこれこそ眞の常住不易の依止處たる一實諦であり、法界の實相であり、この本佛常住の智慧の發射たる、佛界緣起の圓慈觀、無始感應の妙説において、かの最切の、衆生の無始悠久の生命觀に立てる、合理にして且つ神祕

なる宇宙的大家族主義は、始めて眞にその光明を發見して、根本中心を確立し、更にこの第三の統一門より、これと對應的なる第四門を開いて、衆生成佛の一佛乘を示し、この一乘の道に乗じて、最初の基礎的三門の中に含まるゝものを、究極的に充足するに至るのである。

こゝに於て、同胞思想そのものゝ本來の要求たり、本來の意味たる、平等と平和の原則、即ち人類平等、全生類平等の眞意義を、全く完成するに至るのであつて、これが、宇宙法界の目的、宇宙の精神的大生命の進化の目的、十界の實在人格の最後絕對の目的であるのである。こゝに眞に、普遍にして妥當なる、汎神論の徹底充足が見出されるのである。

かくして無始以來、本佛中心の宇宙の實相において、我等衆生もまた無始以來、永遠の實在者であり、しかも我等衆生が相互に同胞であるのみならず、本佛もまた我等と同胞なのであり、たゞ然しながら本佛は我等同胞の大先達であるのであつて、この本佛の感應を仰いで、自己の佛性を開發するのみならず、また他の一切の生類の佛性を開發せしめ、報恩と慈悲と、自行と化他と、上求菩提と下化衆生との、菩薩行實踐、即ち大向道的道徳的生活における、軌範權威は、これを自己人格の内面に見出すことができると同時に、更にこれを必ずや外、本佛の協力に俟たねばならぬのであり、(觀心本尊の意味においては、これも遂に自己の絕對的内面に外なら

ぬのであるが、かくして内外相俟つて、一切の同胞が、その本有の尊厳性を發揮するに至るのである。

而て、心地觀經および菩薩道經等に説かれたる四恩の説は、この佛教の同胞思想を、全體として秩序づけ、且つ統一するのである。まづ父母の恩は同胞思想の根柢であつて、こゝに孝道を教へられ、

慈父慈母長養の恩により、一切の男女皆安樂なり  
慈父の恩高きこと山の如く、慈母の恩深きこと大海の如し  
次で國王の恩において絕對の忠を教へて、しかも

王とは民の父母なり、能く法に依つて衆生を攝護し安樂ならしむるを以ての故に、之を名けて王となす、大王よ當に知るべし、王の民を養ふは當に赤子の如くなるべし、乾けるを推し濕れるを去るに其の言を待たず、何を以ての故に、大王よ當に知るべし、王者の立つことを得るは、民を以て國を爲せばなり、民心安からずんば國將に危からんとす矣。是の故に王者は、常に當に民を憂ひて、赤子を念ふが如く心より離さざるべし（大薩婆經）

更に衆生恩において、いはゆる相互扶助・共存共榮を教へるのであるが、佛教は社會生活なるものを、近代思想の如き單に平面的に考へるのみでなくして、これに實在の根柢を賦與して、一々の人格に本有永遠の生命を明し、こゝに宇宙の絕對歴史ともいふべき、縦に無限なる時間の中に、これを流

動せしめるのである。こゝに於て、この久遠の生命中に輪廻する、無限なる六道の衆生は、一面に於て、皆これ我が父母と見らるゝに至ると共に、他面に於ては、かゝる輪廻界中に彷徨しながら、いはゆる「迷ひつゝ善を求むる」衆生本具の佛性を、自ら開發せんと努力向上するのみならず、他をしてもまた開發せしめんとするところに、自らが今や却て父母の如く佛菩薩の一分の任務を、自己自らに荷ひつゝ、父母の愛子に對するが如き「極愛一子地」の思想に立ち（大涅槃經）「同體の大慈悲心を激發し」（心地觀經）、當於一切衆生、起大慈想、於諸如來、起慈父想、於諸菩薩、起大師想（法華經）

しかもかくの如き、宇宙法界の大歴史において、一切同胞の絕對の中心・完成の先達は、即ち無始常住の本佛であるのであつて、この本佛を中心として三寶の恩が成立し、而て「佛寶の恩、最も上たり」といふことは、宇宙の絕對より見ていふまでもなく明かに而もこの本佛の我等に對する關係は、今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ我が子なり、而も今此の處は諸の患難多し、唯我れ一人のみ能く救護を爲す

汝諸人等は、皆是れ我が子なり、我は則ち是れ父なり、汝等累劫に衆苦に燒かる、我皆濟拔して、三界を出でしむ、此れ實に我が子なり、我は實に其れ父なり、今吾が所有の一切の財物は、皆是れ子の有なり

我も亦これ世の父、諸の苦患を救ふ者なり

といふ、我等の永遠の生命の慈父であり慈母であるのであるから、かくて佛教における同胞思想は、四恩を以て貫かるゝと同時に、また輪廻と解脱、向上と向下、いづれに五つても、父母の恩の觀念を以て、その一切を統一することができ、所謂同胞觀は茲に一段と鮮かに畫龍點睛せられるのである。

是の如き四恩は、一切衆生平等に荷負す  
譬へば世間の諸の色塵の如く、能造の四大よりして生ずるを得たり、有情の世間も亦また然なり、彼の四恩に由つて安立することを得ん

こゝに於て四恩を以て人生國家安定の根柢とし、經綸の大本となすは、實に千鈞の力ありといふべく、志士仁人の造次顯沛にも忘るべからざるところとなるのである。

かくて佛教に於ける同胞思想は、まづ現實の事實として、十界の人格實在を論じ、その價值に於て、本有佛性を論じ、その可能に於て十界皆成を論じ、その實現に於て十如因果を論じ、その表現に於て三世間を論じ、その歸結に於て本佛實在を論ずる。十界の人格實在は一切の根本原理であり、本佛實在はその絕對の統一原理であり、十界皆成はその最終の目的原理である。その皆成たり得るゆゑは、その本質において自覺的意志的に自由なる十界人格の、互具常住の根柢と、その内面を一貫する必然的なる、眞如因果の實現力

と、更にこれに加はる本佛感應の協力とによつて、即ちいはゆる自力他力相結び、佛力・法力・信力、三力合成するところの、宇宙における實在の、構造および作用によるのである。

かくして天地法界の萬象を、悉く我が同胞とする、佛教同胞觀も、實に、一念三千の哲學に於て、その眞意義を明かならしめられるのであり、こゝに天台大師より出でられたる日蓮聖人が、この一念三千の原理より出立して、百尺竿頭一步を進め、遂に無始本佛實在の大教義を完成し、しかもこれを我が己心の内在に結歸して『觀心本尊』の幽微を啓發し、更に同時に宗教絕對の教權を掲げては、一切衆生をして眞乎『開目』せしむべく、宇宙の絕對界における、この超越的本佛の、無始主師親三徳の、大恩を光顯し、その大人格者の眞容を拜して、これと直ちに交通を開くべく、全同胞を擧げて、宇宙家庭、宇宙學園、宇宙國體に入らしめ、こゝに上は本佛釋尊の絕對威徳を仰ぎ、下は吾人佛性の絕對價值を覺らしめ、るに至るのである。

かの佛教中最も難解の學として、華嚴哲學が、四種法界・十重無盡・如來性起の法界緣起と、談理の高遠を誇りながら、しかも遂に、十界の人格的事々無碍なる性具と常住、特に本佛圓慈の大緣起の法界、その無始感應の慈念に包まれたる神祕にして温かなる因縁の血の通ふ大同胞觀を説かざる、無明緣起論・別教一乘説に止まることに想到したならば、け



だし實に思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

かくして本佛常恒の福音たる法華經に根據し 天台一念三千の組織的哲學を經由して 日蓮聖人開目・本尊の統一的教義において完成したる 實在の根本哲理よりして 佛敎における大同胞愛は最も圓滿に發生し來り、その同胞愛の實踐が 報恩と慈悲との二面に現るものである。聖徳太子が憲法において「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり、是れ即ち四生の終歸 萬國の極宗なり」と仰せられたのも、亦この意味を教へられたものである。されば佛敎は たゞに隣人愛とか 人類愛とかを説くに止まらず 一切衆生愛 十界依正にわたる一切の同胞愛を説く、宇宙の一切を擧げて自己の生命と觀するのである。而て本佛の信仰は 常にこの同胞愛の中心に輝くのである。かの三種の慈悲における 無縁の慈悲といひ、本佛觀における 應身常住といふは この幽旨を教ふるものであつて、

雪の日や あれも人の子 樽拾ひ でもない、朝顔に つるべ取られて 貰ひ水ですらもない、心の中より常に毎に自然に起る大慈悲であるのである。佛心とは大慈悲心なりであり、至誠息むなしであり、毎自作是念であるのである。

佛敎 而て 日蓮敎學は かくしてたゞに大同胞思想を唱道したばかりでなく、かゝる全人類同胞 全法界同胞の進むべき 進路と光明を示した、即ち全同胞の文明的大理想を示す

### 記事

#### 本部 團報

興亞奉公日 十二月一日午前六時過第四回の奉公日を講堂御寶前に營み、新願後援部理事より經濟強調、生活改善に關する件、更に根本精神覺醒に就て有益なる三十分講話あつて、七時半散會、立正青年團諸氏の希望に輝いた國鏡一入娘母しく見受けられた。

釋尊御成道會 教主釋尊の八相を示現された中にも、降魔成道といふことは一入有難いことである。

佛本行集經には、  
爾の時に菩薩、既に已に一切の魔怨を降伏し、諸の毒刺を抜いて勝幢を建立し、金剛座に坐し已つて、一切の諸の世間の諍闘の心を滅す、諍闘を滅し已つて内外に調伏し心に清淨行あり、一切世間の衆生をして利益を作さしめんが爲の故に、一切世間の衆生をして安樂を得せしめんが爲の故に、一切諸惡の衆生をして慈心を發さしめんが爲の故に、一切諸惡の衆生をして結垢の行を斷ぜんが爲の故に、自ら已に睡眠瞋蓋を滅除し、心に清淨を得、光明現前し、正念圓滿なり。(乃至)其の夜三分已に過ぎ、第四夜の後分に於て明星將に初めて出現せんと欲する時、夜尙ほ寂靜なり、一切衆生の行と不行と皆覺察せず、是の時に婆伽婆、即ち智見を生じ阿耨多羅三藐三菩提を成したまふ。而して偶有つて説きたまふ、

し 向上進化の大目的を示し 而て實にその絶對の完成を保證したるものである。純宗教的濟度と理想的文明の建設としかもかゝる大理想實現の中心を 我が皇國に取つて

大願を立てん 我れ日本の柱とならん 我れ日本の眼目とならん 我れ日本の大船とならん 等と誓ひし願 破るべからず

と 護國の聖者 佛子日蓮は誓願せられたのである。かくて萬世一系の皇室を奉じ その世界大の御稜威を仰ぐ我國は、その宏遠なる肇國の理想に於ても その悠久なる實際の歴史に於ても、決して單なる家族國家を以て説明せらるべきものではなく、實に本佛緣起の法界の實相を 縮寫結晶したる神聖國家なることを知るべきである。

これを皇道にあつては 天業恢弘といひ 八紘一字といひ、これを佛道にあつては 醍醐一實といひ 開顯統一といひ 天晴地明といひ 日東照西といひ 立正安國といひ 四海歸妙といひ 轉輪聖王の統治といふ。こゝに於て八紘一字の皇道の大理想と 四海同胞の佛敎的大理想とは 全き融合統一を成し遂げ、而て 宇宙的大人格たる 絶對の本尊本佛の優存は 常恒その進路を照す 無限の靈光であり 究極目標であり 絶對の靈力である。

南無妙法蓮華經  
皇紀二千六百年十二月十日 皇都 天恩舎の淨齋にしろす

是の夜四分の三已に過ぎ

餘後の一分に明將に現せんとす

衆類の行不皆未だ動かず

是の時に大聖無上尊

衆苦滅し已つて菩提を得たり

即ち世間の一切智と名く。

爾の時に世尊、既に阿耨多羅三藐三菩提を成し已つて、即ち是

の如き師子音吼を作して、偈を説いて言はく、

苦し能く勇猛にして精進を作さば

聖智を求むる者得て難からず

既に得れば即ち諸の苦邊を盡し

一切の衆罪皆除滅せん。

釋尊の御教は全く勇猛精進を強調されて居る、私共在家出家に限らず能く邁往努力すれば、必ず目的成就すること疑ひはない。

十一日の東天紅を期して多數の佛子 御寶前に拜跪合掌し、悉しく御成道會の勳行を修し、滿堂感謝感激に溢れた。懇談及び朝食を共にして八時過散會。

御書講座と日曜講集 歳末各位殊に多忙の爲め、十二月の下旬は休會と決し、更に明春を期すことになつた。

#### 福島支部 報

秋季大會 十一月廿五日午後六時より福ビルに於て統一團福島支部主催、福島高商日蓮聖人御仰會後援の許に本部より藤部先生、岩淵中佐殿を迎へ日蓮主義大講演會を開催す。講堂滿員。岩井支部長の開會の挨拶に次で戦時將兵の英靈並に皇軍將兵武運長久祈願のため



# 目 次

聖訓摘要	本多日生
開目鈔講話(承前)	小林一郎
歡喜奉行	小西日喜郎
立正安國の春	井上清純
難局に直面して信念に生きよ	岩野直英
搖ぎ無き心	小林一郎
宣撫班從軍より歸りて	中山正男
時代對應の教化	磯部滿事
記事	
○本部團報	
○團費誌料寄附金及維持費領收	

第十四五年二月號



# 統

法財人團  
統

一團發行